



BEPPU UNIVERSITY & JUNIOR COLLEGE

2026 教職への道

No.46

別府大学

CONTENTS

巻頭言	01
教職をめざすみなさんへ	02
令和7年度 教員養成に関する 各学科・課程の取り組み	06
教員に求められるもの	08
教員採用試験の報告	10
教育実習の報告	18
介護等体験実習の報告	22
教育実習で作成した指導案	24
卒業後の私	34

参考資料

1. 教育実習事前の諸注意 36
2. 「義務教育教員免許志願者に対する
介護等体験実習」実施要領 38
3. 令和8年度 大分県公立学校
教員採用選考試験 総合結果 39
4. 過去5ヶ年の教育職員
免許状取得状況 40
5. 別府大学教職課程履修プロセス 41

教職の道を選んだあなたたちへ ― 逆風の中に立つ「希望」 として

別府大学・食物栄養科学部

木村 靖浩

教職課程で学ぶ皆さん、ページをめくる前に、少しだけ目を向けてください。

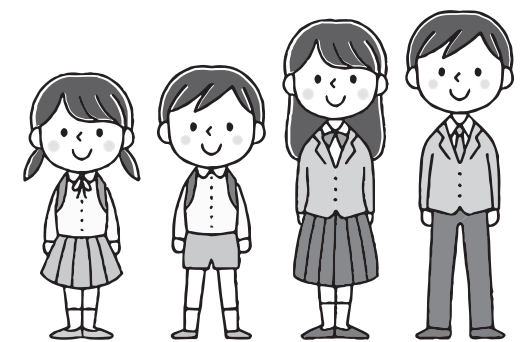
昨今、学校現場を巡る報道は決して明るいものばかりではありません。保護者からの理不尽な要求や謝罪強要といった「学校カスハラ」の問題が深刻化し、それに伴う教職離れや志願倍率の減少が叫ばれています。各地の教育委員会は理不尽な要求から教員を守るための制度作りに取り組み始めました。このような逆風が吹くこの時代に、あえて教職の道を選んだ皆さんの勇気と志に、私は深く敬意を表します。

社会が教員を守る制度（壁）を必要としているのは事実です。しかし、皆さんに見てほしいのは、その壁の内側にある、子どもたちとの世界です。教育とは本来、AIやデジタル教材だけでは代替できない、教える者と学ぶ者が互いに人格を認め合う「絆」のドラマだからです。かつて私の大学時代の恩師は、大学教員になった私にこう言いました。「卒業生は宝物、大事にせいよ。困ったときにきっとおまえを助けてくれる。」私はこの言葉を多く実感しています。将来、あなたが教室で守り、育てた子どもたちは、数年後、数十年後に、必ずや次代の社会を支える、またはあなた自身を助ける「宝物」となって現れます。その時、教員という仕事の真の報酬が得られるのだとは思っています。

学びとは、失敗と挑戦の連続であり、最初から正解が用意されているものではありません。皆さんが

これから現場で流す汗や涙は、決して無駄にはならず、次世代を支えるための確かな礎となります。児童・生徒の人生という、二度とない物語の登場人物になれる尊い仕事。その誇りを胸に、どうか恐れずに進んでください。困ったときには、必ず誰かが、そしてかつての教え子が、あなたを助けてくれるはずです。

また、忘れないでください。皆さんが学ぶこの大学もまた、皆さんにとっての「母港」であり続けるということを。現場で波に揉まれ、立ちすくみそうになった時は、いつでもここへ帰ってきてください。私たちは、いつまでも皆さんの伴走者であり続けます。



教職をめざす みなさんへ

「立ち止まり 薔薇の香りをかぐ心を」

明豊中学・高等学校

教諭 立川 研一

教職課程の皆さん、こんにちは。2025年11月7日に、1号館46教室において次年度教育実習を予定している皆さんに講演させていただいた、立川です。講演の最後に紹介した、「Don't forget to stop and smell the roses.」という英語のフレーズは、35年前の私の個人的な体験に基づくものです。



その体験について書いた私のエッセイ作品が、今年度の「小諸・藤村文学賞（エッセイコンテスト）」で優秀賞第一席をいただくことができました。全文はかなり長いので、短く編集したものを、僭越ながら以下に紹介させていただきます。皆さんの心にも届くといいなあ、と願っています。

35年前、駆け出しの英語教師だった私は、夏の1ヶ月、アメリカのホームステイプログラムに中学生28人を引率することになった。けれどその時の私は、「海外経験もなく、言葉が十分に通じない中学生が、短い滞在でホストファミリーと心を通わせることができるのか」と、懐疑的な考えも持っていた。

7日目の朝、スタディセンターで1年生の女子生徒が笑顔で話しかけてきた。「昨日キッチンでお母さんに『何か手伝おうか？』って言ったら、『いいえ、あなたはそこに座って、私のクッキーをおいしいって言ってくれたらそれでいいの。それが私の幸せなのよ』って言ってくれたの」。すべて英語のや

りとりだ。私は思わずたずねた。「どうして全部分かったの？」すると彼女は、首をかしげながら「なんだかよく分からないけど、全部わかったみたい」と言った。

ステイも後半にさしかかった月曜日の朝、彼女は涙を浮かべてもう1つの出来事を語ってくれた。お父さんが「君がアメリカで1番心に残っている場所はどこだい？」と問い、彼女が「サンフランシスコの海」と答えると、「よし、もう一度思い出作りに行こう」と家族で海へ向かったという。海岸でお父さんは水平線を指さしながら、「この海のずっと向こうに君の本当の家族がいるんだね。君をここへ来させてくれたご両親に心から感謝するよ」と言い、家の鍵のついたペンダントを彼女の首にかけた。「これは僕の家

の鍵だ。君はもう家族なんだから、いつでも『ただいま』と言って帰っておいで」。

私は感激しながらも、再びたずねた。「それ、全部英語で話したんでしょ。どうして分かったの？」すると彼女は、「なぜか分からないけど、家族の言うことなら全部分かる」と言うのだ。

参加者の多くが言葉を越える交流を体験していたのだと思う。しかし彼女の家には何か特別な空気が宿っていた。帰国間際、私はその家にディナーへ招かれ、大きなテラスで、手作りのクッキーと温かなコーヒーをいただいた。何もかもが行き届いた大きな家、高級車が3台並ぶ車庫、庭にはプール。けれど私を最も驚かせたのは、彼女の寝室だった。机や本棚、クローゼットやおもちゃ箱まで揃っていた。まるで誰かがつい昨日までそこにいたかのように。テラスでお父さんと向かい合い、仕事や趣味や家族のことを話すうちに、彼は静かに過去を語り始めた。若くして会社を興し、がむしゃらに働き、大きな家と高級車こそ家族の幸せだと信じていたこと。だが、私たちが訪れる前年、小学生の長女が突然の交通事故で亡くなったこと。死に目に会えなかった自分を責め続け、積み上げてきた価値を根本から問い直したこと。悲しみは深く、長く、しかしやがて「この部屋を誰かのために開こう」と決めたこと、そして娘の部屋に、言葉の違う子どもを迎え、愛し

たいと願ったのだ、と。

3歳の妹は、まるで本当の姉が帰ってきたかのように喜んでいたという。お父さんの話は淡々としていたが、言葉の間に沈黙があり、その沈黙の重さがすべてを語っていた。私は気づけば涙をこぼしていた。「伝えようとすれば心は伝わる。言葉はその手助けにすぎない」、そう心から思えたのはこの時が初めてだったかもしれない。

帰り道、かつての自慢だった高級車の中で、お父さんがふとたずねた。「君には愛する者がいるかい？」独身だった私は「強いて言えば、音楽が好きで、ギターを愛している」と冗談めかして答えてしまった。彼は真面目な顔で、「本当に愛しているなら、毎日ギターのために時間をかけなさい。どんなに短くてもいい。私はそれができなくて後悔している」と言った。

車を降りる間際、彼は私を呼び止め、次の一文を私に贈った。

“Don't forget to stop and smell the roses.”

初めて耳にするフレーズだったが彼の心はまっすぐに伝わってきた。「どんなに忙しくても、たとえ苦しいときでも、そこに薔薇があるなら、立ち止まり、その香りをかぐ心を忘れてはいけない」。

月明かりの下、彼の車が滑るように走り去る。その光景は、映画の一場面のように今も私の胸に残っている。ホームステイが終わるとき、彼女と家族がどのように別れたのか私は知らない。けれど、今でも彼らの交流は続いていると聞く。

振り返って現代社会を思うとき、言葉が通じ合う者同士の間にこそ、なんと誤解やすれ違いが多いことかと思う。今こそ、言葉だけに頼らないコミュニケーション、立ち止まり、薔薇の香りをかぐように、目の前の人の心にそっと耳を澄ます力が必要な時代なのではないだろうか。あの夜の一文は、今も私の心に静かに息づいている。言葉を超えた心と心の交流の象徴として。

教職をめざすみなさんへ

別府大学・食物栄養科学部 食物栄養学科

教授 高松 伸枝

中学校・高等学校は「教科の専門性」を磨く時期である一方で、生徒が自立へ向かって生活を大きく変える時期でもあります。部活動、塾、スマホ、睡眠不足、欠食、エナジードリンクや間食の増加―生活の乱れが表面化しやすいこの年代に、学校は学力だけでなく、健康と未来の土台を守る場でもあります。その中心にあるのが、毎日の食事と生活習慣です。



日本は世界でも長寿国で、OECDの国別ノートでも平均寿命は84歳台、肥満有病率はOECD平均より低い国として示されています。この背景には、主食・主菜・副菜を基本に、魚介・大豆製品・野菜や海藻などを取り入れる「日本型の食生活」が、循環器疾患などの死亡リスク低下と関連するという疫学研究の積み重ねがあります。

一方で、日本の栄養・健康の課題は二極化しています。令和6年の国民健康・栄養調査では、20歳以上の野菜摂取量の平均は258.7gにとどまり、近年は減少傾向が示されています。また男性の肥満（BMI≥25）は32.4%で高止まりし、歩数も男女ともにこの10年間で有意に減少しています。つまり、「野菜不足」「運動不足」「体重管理の難しさ」が静かに進み、将来の生活習慣病やフレイルのリスクが高まっています。

では、いつ介入すべきでしょうか。食習慣は大人になってから変えるのが難しい行動の一つであり、子どもの頃の食行動や体格、食事内容が成人期まで一定程度追跡（トラッキング）されることが、系統的レビューでも示されています。つまり学童期・思春期は、将来の健康を左右する分岐点です。

小学校・中学校には、健康づくりの強い武器があります。教科の学び、保健指導、部活動、学校行事、

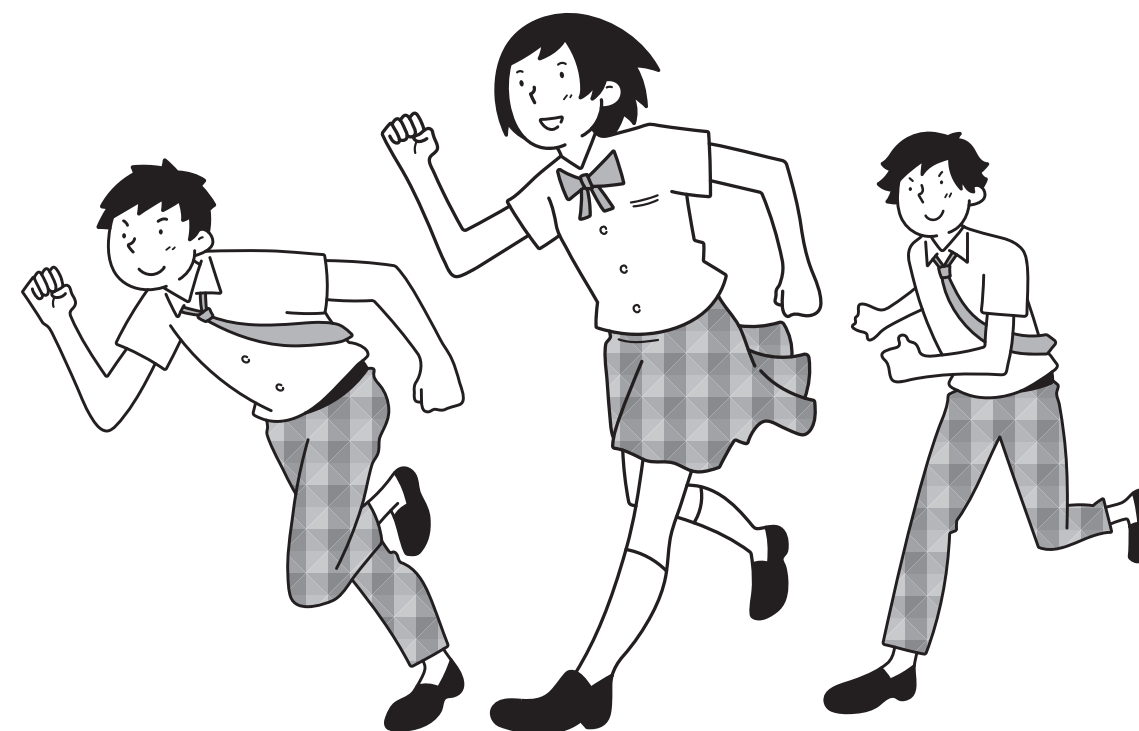
そして（給食または昼食指導などを含む）日常の生活指導が、同じ場所で行われることです。ここで大きな役割を担うのが栄養教諭です。栄養教諭は、給食の管理だけでなく、給食を教材として食に関する指導を行う教育専門職で、令和6年度には全国で6,945人が配置されています。文部科学省は、栄養教諭が「食の自己管理能力」や「望ましい食習慣」を形成する食育を担うとしている一方、現状では給食管理業務に比重が置かれ、本来の指導を十分に発揮しにくい課題も示されています。だからこそ、担任、養護教諭、部活動顧問、管理職が目標を共有し、チームとして支えることが不可欠です。

大分県に目を向けると、平均寿命は全国上位ですが、健康寿命との差を縮める取り組みが重要です。資料では、特定健診（40～59歳）でBMI25以上の肥満が男女計33.3%と示され、生活習慣病対策の継続が課題です。県は「健康寿命日本一」を掲げ、食と運動の具体目標として「減塩マイナス3g」「野菜摂取350g」「プラス1500歩」をスローガンに、うま塩（減塩）や「まず野菜、もっと野菜」などの県民運動を進めています。児童・生徒の生活を整えることは、そのまま将来の県民の健康指標を底上げする「予防の入口」になります。

食育の大切さは、知識を教えることにとどまりません。生徒が「自分の体調に気づく」「選べる」「続けられる」力を育てることです。例えば、昼休みに「今日は野菜をどこでとれた？」と短い問いを投げ、理科ではエネルギー代謝を扱う、部活動では補食と水分を扱う一教科と生活がつながった瞬間に、学びは「自分ごと」になります。スマホや夜更かしで朝食が抜けがちな児童・生徒には、まず「一口の朝食」など小さな目標から始めてみるのもよさそうです。

教室には、欠食、やせ・肥満、家庭環境の違い、食物アレルギーなど、多様な背景があります。だからこそ、先生の一言、たった一つの授業計画が児童・生徒の選択を変え、将来の健康を変えます。小学校・中学校は短いようで、人生の型をつくる濃い時間です。栄養教諭と連携し、教科・特別活動・部活動・

家庭をつなげて、児童・生徒の一生の健康を支えるという高い意識を持った先生が増えていくことを期待しています。



教職課程

公立学校の教員採用試験に関する指導支援について

教授 櫻田 裕美子

おおよその自治体の教員採用試験は、1次試験と2次試験の二段階で行われる。1次試験は筆記試験が中心であり、教職教養と教科教養に関する知識が問われる。2次試験では、面談や模擬授業を通して教員としての資質や能力が測られる。また、近年では大学推薦制度を設定している自治体も少なくない。

別府大学教職課程では、これら1次試験、2次試験、大学推薦それぞれについて指導支援を行った。

教職課程が関与する1次試験対策として、採用試験勉強会「ドラゴン櫻」がある。この「ドラゴン櫻」は、学生が主体的に運営する活動である。しかし、メンバーの募集、中心的に運営を行う学生リーダーへの助言やメンバーに対する勉強方法の助言等様々な場面において教職課程教員が支援を行った。さらに現在、来年度採用試験受験に向け、採用試験対策を行う出版社のオンデマンド教材を導入し、学生の学びを支えている。

2次対策としては、模擬授業及び面接それぞれについて指導を行った。本年度は、学校現場での経験がある教員を中心として、個別指導（1回1時間程度）と集団での面接指導を行った。1次試験を突破した学生を対象に行われた本取組は、6月後半から7月後半にかけて実施された。模擬授業のレベルアップや面談での回答内容のブラッシュアップのみならず、受験生の相談にも丁寧に対応し、試験前の不安解消等にも力を尽くした。

さらに近年、教職課程では大学推薦を利用した教員採用試験の支援にも力を入れている。推薦学生の選定に際しては、教職課程教員と学科教員とで面談を行い、その結果を教職課程委員会にて承認を得る手続きを取っている。本年度も、推薦学生決定後には教職課程から1名の担当者を選定し、当該学生についての推薦書を作成すると共に、推薦学生が作成する選考レポート（自己紹介書等）の作成指導・添削を行った。

採用試験に関する指導・支援の充実が、教員採用試験の合格に結実していることを実感している。本年度は16名の学生が夢をかなえ、来春から公立学校の教諭として教壇に立つ。さらに現在、24名の「ドラゴン櫻」メンバーが来年度実施の教員採用試験に向けて勉強を続けている。

これからも教職課程では、養成のみならず採用段階においても学生をサポートし、彼ら彼女らの夢の実現を後押ししていく。

文学部 国際言語・文化学科

国際言語・文化学科・国語科教員採用試験に向けて

教授 高木 伸幸

国際言語・文化学科では、国語科教員を目指す学生を対象とする教員採用試験勉強会を開催してきました。今年度で15年目に入ります。今回は一次試験合格者を対象に、二次試験対策を実施しました。

課されたテーマによって10分間の模擬授業に取り組み、参加者全員で良かったところ、修正すべき点について意見を出し合います。7月下旬から8月初めにかけて、その方法で1人5回ほど模擬授業を行いました。少しずつブラッシュアップし、無駄なくわかりやすい授業に仕上げることができました。希望者には面接対策も行い、二次試験に向けて万全の準備をいたしました。

結果、受講した学生の中から、大分県中学校教員採用試験に3名の現役合格を出すことができました。参加された皆さんの努力が実り、嬉しく思います。

今後も国語教員をめざす学生諸君の夢の実現に向けて活動を続けていきます。

文学部 史学・文化財学科

教職勉強会の活動を振り返って

准教授 赤松 秀亮

飯坂先生のあとを受けて、2025年度より史学・文化財学科教職勉強会の顧問になりました。同会では通年、加入している学生が毎回1～2人模擬授業を行い、参加者や顧問からフィードバックを受けることで授業能力の向上を目指すほか、教員採用試験の過去問演習などを通じて、教採対策を行うことを主な活動内容としています。

私自身、大学院生時代に計4年間、非常勤講師として中学校・高等学校に勤め、実際に就職することはありませんでしたが、中学・高校の専任教諭として内定をいただいたこともあったので、中高の教員を目指す学生たちとの関わりは大変楽しいものでした。

皆さん意欲的に頑張っておられる一方、教えるテクニックやグループワーク、プリントの作り方など、授業の方法そのものに目が行きがちであるように感じられました。その單元において何を本質として教えるべきか、また背景にはどのような研究があるのかといった、教材研究が課題であるように見受けられます。文学部で歴史学を学んでいることを活かした授業づくりとは何か、大学で歴史学を学びながら教員免許を取得する意義とは何かを、いま一度考えていただきたいと思います。

最後になりましたが、今年度で別府大学を退職いたします。1年という短い間で、毎回参加できていたわけでもありませんでしたが、ありがとうございました。勉強会のますますの発展を心よりお祈りいたします。

教員に 求められるもの

子どもたちと一緒に 未来を創る

別府市教育委員会 学校教育課

指導主事 **大島 憲征**

先日は、ご清聴ありがとうございました。

近年、報道などにおいて、学校における働き方改革の文脈で「教職は大変」といった話題を見聞きしているかもしれませんが。みなさんが教職課程の学修を進める中で、令和の日本型学校教育や次期学習指導要領に向けた論議といった話題にも触れていることと思います。

今回は学習指導に関わって「学ぶ楽しさと成長の喜び ～教職の魅力と学習指導～」というタイトルで話をさせていただきました。変化の激しい社会を生きる子どもたちに必要な資質・能力を身につけてもらうという教職の使命は、時に「重たく」感じられるかもしれません。しかし、子どもたちに主体的・対話的で深い学びを求めるのと同時に、先生方もそのように学ぶということは、「上記の使命を果たすにはどうすればよいか」という大きな課題を、様々な関係者と協働して探究していく学びに他なりません。私は、この課題は一生をかけて探究するような、とてもやりがいのあるものだと思います。そしてそれは、「子どもたちと一緒に未来を創る」という魅力的な営みだと考えます。

講義でもお伝えしましたが、みなさんが別府大学でそれぞれの専攻に関する学修を進めながら、自ら選んで教職課程を履修されていることに敬意を表します。未来に向けて共に探究する「同志」が、次世



代にこのように数多くいることを大変嬉しく、また誇りに思います。

さて、みなさんは主に中学校、高等学校の教諭、または栄養教諭の課程を履修されていると思います。国語科・社会科・美術科等の専門教科や専門分野を持った教員の道へ進む方が多いと思いますが、ぜひ、あなた自身がその専門を「面白がる」ことを忘れないでほしいと思います。私は中学校数学の教員ですが、授業で生徒たちとあれやこれや数学的に探究する中で、毎年、面白い発見があります。生徒の間違い方からも「なるほど。こんな捉え方があるのか」と学ぶことが多く、またユニークな意見や視点に感心させられることもよくあります。

現代は、知識の伝達の時代から「生み出す」時代になったとも言えます。既存の知識の伝達と再生、ペーパーテストで何割正解したかを競うことだけが目的ではないということです。生徒と共に教科や単元、教材の価値を味わい、何より先生自身が「面白そう」にしている授業を日々つくっていくれば、その熱は確実に生徒に伝わり、生徒の学びを触発するだろうと思います。

キーワードは「探究」と「わくわく」です。

あなた自身が子どもたちと共に学ぶ、子どもたちから学ぶことを楽しみ、また、教科内容や指導の工夫などについてわくわくしながら探究し続けることで、豊かな教職人生を歩んでいくことができると信じます。

みなさんの今後のご活躍を祈念申し上げます。ありがとうございました。

チーム学校による生徒指導

別府市教育委員会 学校教育課

指導主事 **藤原 祐樹**

今回の講義では「生徒指導における児童生徒理解と対応のプロセス」と題しまして、「児童生徒とどうかかわるか」「これからの生徒指導の方向性」等について、話をさせていただきました。



別府大学で理論を学び、教育実習を終えた皆さんであれば、今回の話は生徒指導について、より理解を深められたのではないかと思います。皆さんの真剣な表情で受講する姿は、自分が学生だった頃とは少し違っていて、講義をしている自分ももっと頑張らないといけないなと感じさせられました。

今回の講義では、現代の児童生徒が抱える課題は、多様化・重層化が一層進んでおり、これまでの教師個人の経験則や勘に頼る指導には限界が生じてきていることをお伝えしました。そのため、以前のような特定児童への事後的な対応から、全ての児童生徒の成長・発達を支える開発的・予防的な働きかけへと転換する必要がある、全教職員の協働による組織的・実効的な生徒指導体制の構築（「チーム学校」）によるアプローチが不可欠となっています。

自分が教育現場で初めに働いたのは中学校で、赴任時は、一部の生徒に落ち着きがなく、授業が成立しないこともよくあるような学校でした。若かった自分は厳しい指導で生徒を落ち着けようとしますが、全くうまくいかず、逆に生徒から足元を見られるような接し方をされていました。当時の学年長はそんな生徒達にも、日々穏やかに接し（時には厳しい指導もするが）生徒の気持ちに寄り添い、懐にうまく入っていくような関わり方をしていたのを覚えています。その時の経験から、自分も事後的な対応ではなく、開発的に子どもたちに働きかけ、生徒が自分で考え行動するような指導の大切さを体験的に

学ぶことができたと思います。

また、講義の中でも話題にした「同僚性」についても、非常に重要なキーワードになると思います。子どもたちと関わっていく中で現場での経験が少なければ対応に迷いが出たり、行き詰まったりすることも多くあると思います。経験の少ない先生方が増えている昨今の現場で、気軽に相談できる人間関係を日常的に作り、チームで子どもを支えていけることは本当に心強いことだと思います。何気ない、雑談から周囲の先生との仲を深めていってほしいと思います。

これから、教職を目指す皆さんは現場に出ると始めは苦勞が多いかと思いますが、こんなに直接感謝される仕事は他に無いと思います。

皆さんの今後のご活躍を心より願っております。



教員採用試験の報告

教員採用試験について

(大分県 中学校 国語)
國廣 ここ乃
(国際言語・文化学科4年)

はじめに

この度は、私が受験いたしました教員採用試験について、後輩の皆さまへ少しでも参考となりますよう、報告をまとめさせていただきました。私は、大分県の中学校国語科を志望し、受験しました。受験に際しては、不安や悩みも多有りましたが、合格までの過程で得られた学びは非常に大きいものでした。本稿では、試験の日程や内容、また私が行った準備や勉強方法について、具体的にお伝えします。

採用試験の日程・流れ

私が受験した大分県の教員採用試験は、1次試験と2次試験の二段階で実施されました。1次試験は6月15日に行われ、内容は以下の通りでした。

- 教職教養、一般教養の筆記試験（教職教養 35問／一般教養 15問）
- 専門教科（国語）の筆記試験

1次試験の結果が発表された後、2次試験は8月5日（校種・教科によって異なります。）に実施されました。二次試験の主な内容は、以下の通りです。

- 模擬授業 テーマ「新しい先生に町の良さを紹介しよう／スピーチ」（十分）／面接Ⅰ
- 面接Ⅱ

【面接Ⅰで問われたこと】

模擬授業についてと、専門的な知識について問われました。

- 模擬授業で意識したこと
- 評価の方法
- 敬語の使い方の指導について
- 評価規準、評価のために前もって準備すること
- このテーマ（スピーチ）が苦手な生徒に対する指導方法

「評価」と「個に応じた指導」に重点を置いていると感じました。学習指導要領を熟読し、前もって準備をしておきましょう。

【面接Ⅱで問われたこと】

自己紹介書Ⅱを基に問われました。

- 「生徒を支える」とは何か
- 安心して過ごせる居場所を作るためにすること
- 不祥事についてどう思うか、また起こさないためには（ほとんどの受験者が問われているようです。また、昨年と同様とのことでした。）
- 自分の性格を具体的に（私の場合、「真面目」と書いていたのを深掘りされました。）
- 自分が正しいと思っていることを、周囲が否定してきた場合の対応
- ストレスの発散方法
- 挫折の経験、どう乗り越えたか
- 達成感があったと感じている経験（私は書道について書いたのを、それを問われました。）を通して、何を得られたか
- 何を工夫したか
- その経験を生かして、生徒に何を伝えていきたいか

自分の思いや考えを、とにかく伝えましょう。自己紹介書に力を入れることで、それらが明確になると思います。

試験に向けた準備・勉強方法

私が準備に取り組んだのは、大学3年生の頃からです。ここでは、私が実際に行って効果的だと感じた勉強方法を中心にまとめます。

【教職教養・一般教養】

私は主に市販の参考書として『これだけ覚える教員採用試験 教職教養（LEC）』、『大分県の教職教養 参考書』『大分県の教職・一般教養 過去問』の3冊を使用しました。まずは、内容を大まかに理解した上で、問題演習を繰り返しました。過去問につきましては、月曜日に1年分の問題を解き、火曜日から土曜日にかけて間違えた問題をじっくり復習するという方法をとっていました。翌週の月曜日には、再び同じ年度の問題に取り組むとともに、新たな年度の問題も解くようにしていました。また、長時間まとまった勉強時間が確保できない日でも、通学中の電車内では単語カード（間違えた問題をまとめたもの）を確認し、大学前の坂を上る際や入浴中には、YouTubeにある教育基本法の聞きながし動画を流すなど、隙間時間を活用するよう心がけていました。毎日短時間でも教職教養の語句に触れるよう努めていたためでしょうか、今でも「夢」や「精神」といった話を耳にするとフロイトを、「記憶」という語を聞くとエビングハウスを思い出してしまいます。一般教養に関しては、参考になるような勉強方法をとっていなかったため、省略します。

【専門教科】

国語科の筆記試験については、内容が入試問題に近いと感じており、そのつもりで準備を進めました。私は現代文が比較的得意であったため、古文・漢文を中心に学習を行いました。また、漢文が得意な知人がいましたので、週に一度解説や演習のポイントを教えてもらうなど、継続的に指導を受けながら学習を深めていきました。

【模擬授業・面接】

模擬授業については高木伸幸先生に、面接につい

ては小池楠男先生にご指導を賜りました。経験豊富な先生方からいただいた助言は、いずれも的確で、私にとって大変学びの多いものでした。言い方が適切ではないかもしれませんが、受験に向けては、先生方のご経験やご指導を積極的に「活用」することが、確かな力に繋がると感じています。

おわりに

教員採用試験は長期戦であり、心が折れそうになる瞬間も少なくありません。しかし、努力を重ねた分だけ確実に力は伸び、自信にも繋がります。また、試験勉強を通して、自分がどのような教師になりたいか、を深く考える機会にもなりました。

精神的に辛くなった際には、どうか迷わず先生方にご相談ください。私自身、模擬テストの点数が想像していたよりも低く、気持ちが大きく落ち込んだことがありました。その際、櫻田先生に相談させていただいたのですが、先生からは「自分の弱みがわかったのだから、プラスに捉えて。あとはそこを徹底的に勉強しなさい。」と温かいお言葉をいただきました。視野が狭くなっていた私にとって、その言葉は大変励みとなり、前向きに学習へ取り組みきかけとなりました。

不安や焦りを抱えるのは当然のことであり、ひとりで抱え込む必要はありません。周囲の先生方や仲間の支えを借りながら、どうか最後まで自分を信じて取り組んでいただきたいと思います。皆さまがそれぞれの夢に向かって力を発揮され、教壇に立つ姿を心より応援しています。

教員採用試験を終えて

(大分県 中学校 英語)

大塚 悠未

(国際言語・文化学科4年)

はじめに

この度、私は大分県中学校英語科の教員採用試験を受験しました。ここでは大分県の教員採用試験の日程・内容、試験に向けた準備・勉強方法、結果発表について述べていきます。

採用試験の日程・内容

大分県の教員採用試験1次試験は、6月15日に行われました。大分県は、一般教養、教職教養＋専門教養が出題されました。7月15日に1次試験の合格発表があり、2次試験は8月1日に行われました。2次試験は、模擬授業（10分間）＋模擬授業等専門性に関する面接、個人面接、実技試験（英語での面接）が行われました。8月29日に合格発表が行われ、約2ヶ月半に渡る教員採用試験が幕を閉じました。

試験に向けた準備・勉強方法

1次試験

1次試験の内容は、前述の通り一般教養、教職教養＋専門教養でした。私は教員採用試験の勉強に取り組み始めた時期が周りと比べて遅く、4年生になる前の春休み、2月頃から勉強をスタートしました。1次試験の過去問をひたすら解き、間違えた問題の解説を読み込んでなぜその答えになるのかという過程をしっかりと理解するようにしました。最終的には出題される問題の1行目を読んだすぐに答えがわかるようになるまで繰り返し解きました。また、教育委員会のホームページで大分県の行っている教育政策に目を通したり、教員養成セミナーに掲載されている教育に関する時事問題を見てみたり、教員採用試験の予想問題がついていることもあるのでそれを解いてみたりして様々な問題に触れてみる

のもいいと思います。教員養成セミナーは図書館にも置いてあるので是非活用してみてください。

専門試験の勉強方法に関しては、過去問の他に英検準1級レベルの長文問題を解いて長文に慣れるようにしました。大分県の英語科は長文読解の問題が多く出題される上に配点も高いため、日頃から長文に触れて慣れるようにすることはとても大切だと思います。

2次試験

2次試験の内容も前述の通り、模擬授業（10分間）＋模擬授業等専門性に関する面接、個人面接、実技試験（英語での面接）が行われました。模擬授業のテーマは、7月上旬から中旬に大分県教育委員会のホームページに掲載されました。私は教育実習が終わった次の週からすぐに2次試験の準備を始めたのでこの時期はとても大変でした。2次試験に向けて私がしたことは3つあります。

1つ目は、模擬授業及び面接を先生方に見ていただくことです。まず、私は教職課程主催の教員採用試験対策で模擬授業を見ていただきました。ここでは模擬授業の他にも面接の際の入退室の仕方などの立ち振る舞いも教えていただきとても有意義なものとなっていました。その他にも山野先生、小池先生、針塚先生、佐々木先生、藤森先生、実習先の先生方にも個別に模擬授業及び面接を見ていただき、貴重なアドバイスをいただきました。先生方はお忙しい中時間を割いてくださっているため、一つ一つの対策を本番同然と思って頑張りました。緊張感を持った場数を踏めたお陰で本番も練習通りにいけたので良かったです。

2つ目は、自己紹介書を書くことです。これは2次試験の前に提出するものです。個人面接の際にはこの自己紹介書に書かれたことをもとに質問されました。そのため、この自己紹介書には自分のアピールポイントや深掘りされてもしっかりと答えられる内容を書くようにしました。1次試験の合格発表から自己紹介書の提出期限まであまり時間がないため、自己紹介書の様式が教育委員会のホームページ

に掲載され次第、早めに準備することをおすすめします。私は針塚先生、小池先生に添削していただきました。

3つ目は、2次試験の過去問を入手することです。私はキャリア支援センターの方に頼んで過去問をコピーしていただきました。そしてその過去問をベースに面接の対策をしていきました。面接の質問に対しての自分の答えを文で書いても覚えられないので箇条書きで書くようにしました。そして練習時には、メモを見ずに答えられるようにしました。また、1次試験の対策で示した教員養成セミナーを2次試験でも活用しました。教員養成セミナーには、面接でよく聞かれる質問や、答えるのが難しい質問の答え方などが掲載されておりとても参考になりました。

最後に

ここまで大分県の教員採用試験についてまとめてきました。教員採用試験の対策をしていた期間はとても大変でしたが、周りの人の支えがあって無事に乗り越えることができました。最初のうちは中々解けなかった過去問も最終的には全問解けるようになるまで参考書がボロボロになるまで繰り返し解きました。対策をしていく中で、やる気が出ない日もあると思います。その時は、「今日は過去問1年分だけやろう」、「この大問を完璧にしよう」など自分の中でのハードルを低めに設定して、何もやらないという日を作らないようにすることも大切だと思います。また、試験に合格したらこれを買う！ここに旅行に行く！などと具体的なご褒美を決めておくこともモチベーション維持に繋がると思います。

教員採用試験を受験するにあたり、不安な気持ちや悩むことがあるかと思います。この先教員採用試験を受ける方にとってここに書いたことが少しでも参考になると嬉しいです。皆さんと教員として会うことができる日を楽しみにしています。

教職への道 教員採用試験について

(中学校 長崎県 美術)

平山 愛華

(国際言語・文化学科4年)

私は長崎県の中学校美術科教員を志望し、教員採用試験を受験しました。

1次試験

長崎県では県庁に過去3年分の教員採用試験の過去問題が保管されているため、私は大学2年生の頃から県庁に足を運び、問題の傾向や出題形式を把握することから始めました。長崎県では一般教養の筆記試験がなく、教職教養・専門・実技が主な内容となるため、必要な範囲を早めに理解した上で学習を進めました。一次試験の点数配分は、教職教養23点、専門50点、実技75点であり、特に実技の比重が大きいことが特徴です。

専門分野では、他県のような記号問題ではなく記述問題が多く、漢字の書き間違いや表現の正確さに注意して対策を行いました。また、長崎県の美術はスペイン美術との関わりが深く、スペインの画家や作品が比較的多く出題される傾向があるため、その点を意識して学習しました。勉強には長崎県の高校で実際に使用されている美術の教科書を活用し、まずは大きく取り上げられている作品や画家から学び、徐々に細かい内容を詰めていきました。最終的には、教科書に書かれている内容をほぼ丸暗記するほどまで取り組みました。

教職教養では、青本と赤本を中心に学習しました。特に赤本を繰り返し使用し、声に出して読むことや書いて覚えることを意識しました。青本では過去問演習を行い、知識の定着を図りました。また、移動時間などにはYouTubeの教職教養解説動画を聞き流し、耳から覚える工夫もしました。教育心理や西洋教育史など、人物名を覚える必要のある分野は苦手でしたが、暗記方法を工夫した動画を見たり、

友人と問題を出し合ったりすることで、楽しく学習することができました。一方、教育法規はニュアンスで覚えていたため不安もありましたが、結果的には得点できており安心しました。ただ、試験直前まで「もっと勉強しておけばよかった」という後悔が残ったため、早めの準備の大切さを強く実感しました。

専門科目については、勉強を始めた当初は何から手をつければよいのかわからず、2週間ほどは効率的な学習ができなかったように思います。しかし、教科書を読み進める中で、自分が理解できていない部分が見えてきてからは、徐々に勉強が進むようになりました。試験2か月前からは、先生方や長崎県の採用試験を受験した先輩方から情報をいただき、自分の得意分野や苦手分野を把握した上で、重点的に対策を行いました。覚えるべき用語や画家名、作品名などは付箋に書いて部屋中に貼り、ノートも見える場所に置くことで、努力を可視化し、モチベーションを保ちました。

また、長崎県の美術科では1次試験で実技があります。私の年度は水彩で人物を描く課題でしたが、事前に内容の公表がなかったため、静物画しか練習しておらず、採用試験で初めて人物の水彩画を描くことになりました。そのため、これから受験される方には、先輩や先生から情報を集め、幅広い題材で実技練習をしておくことをおすすめします。

2次試験

2次試験当日は、会場に集合後、教科ごとに数人ずつの班に分かれて待機し、最初に課題が提示されました。面接は1次試験の点数が低い順から進み、課題を確認してメモを取り、その後、順番に面接へ向かう流れでした。面接では、まず提示された課題について自分の考えを説明し、その後に面接官からの質問、さらに事前に提出していた調査票に基づく質問が行われました。

課題の内容は、中学校2年生の水彩画の授業についてで、「昨年度の反省として『楽しかったが、何を学んだのかわからなかった』という意見が出た。

それを踏まえて、どのように授業を改善するか考えてください」というものでした。この課題に関しては、事前の対策として、2次試験当日の時点では教育実習に行けていないことが自分の弱点になるのではないかと考え、大学の先生と相談しました。その結果、中学校の学校見学をさせていただいたり、現職のOBの先生とつないでいただき、2次試験について話を聞いたり意見をもらったりする機会を得ることができました。その経験を踏まえ、実際の学校現場を想定した、より現実的な意見を述べることできたと思います。また、面接では「まず結論を述べ、その後に理由を短く端的に伝える」ことを意識して受け答えを行いました。面接中には、姿勢が良いことや、はっきりと話している点について評価していただく場面もあり、非常に答えやすい雰囲気の中で面接を受けることができました。さらに、長崎の大学で同じ試験を受けており、早い段階で面接を終えた友人から情報をもらっていたため、その内容を踏まえて対策を詰めることができた点も、大きな支えになったと感じています。

最後に、教員採用試験に向けた勉強は、早めに始めることが大切だと多くの先生方から言われると思います。私自身も同じように助言をいただいていたが、「まだ大丈夫だろう」と考えてしまい、本格的に勉強を始めたのは試験の約4か月前でした。さらにそのうちの約1か月間は、勉強方法が分からず迷いながら手探りで進めており、本腰を入れて取り組めるようになったのは試験の2か月前でした。結果として採用試験に合格することはできましたが、試験当日まで常に切羽詰まった気持ちで、不安や苦しさを感じながら勉強していたことも事実です。その経験から、2次試験は空振りするかもしれないと考えるくらい、精神的にも余裕がありませんでした。だからこそ、先生方がおっしゃる通り、本当に早めから準備を始めることが大切だと強く感じています。

また、採用試験は一人で乗り越えるものではなく、先生や友人など、周囲の人を頼りながら進めて

いくことが重要だと思います。特に2次試験は、自分一人の力だけでは合格できなかったと感じています。大学の先生に相談したことで、学校見学の機会をいただいたり、現職のOBの先生につないでいただいたりしたことが、2次試験対策の大きな鍵となりました。自分の不安や弱点を正直に伝え、支援を受けることで、考えを深め、自信を持って試験に臨むことができたと感じています。

これから教員採用試験を受ける皆さんには、ぜひ早めの準備と、周囲の力を借りることを大切にしながら、自分らしく試験に挑んでほしいと思います。皆さんの挑戦を心から応援しています。

志す夢の実現の為に ～教員採用試験に向けての道標～

(宮崎県 中学校 社会)

盛 武 宥 太

(史学・文化財学科4年)

はじめに

私は、宮崎県の中学校社会の教員採用試験を受験しました。ここでは、宮崎県の教員採用試験の日程・内容、試験に向けた準備・勉強方法、結果発表について述べていきます。

採用試験の日程・内容

宮崎県の教員採用試験1次試験は、6月15日(日)に行われました。宮崎県は、他県の一般教養、教職教養＋専門教養と異なり、教職教養＋専門教養が出題されました。7月7日に1次試験の合格発表があり、2次試験が7月30日に行われました。当日、試験は午前中に実施され、私は始めにグループディスカッション(35分)、後に模擬授業(10分)＋個人面接(15分)を行いました。そして、9月12日に2次試験の合格発表が行われ、約2か月に渡る教員採用試験が幕を閉じました。

試験に向けた準備・勉強方法

1次試験

私が、1次試験を突破する上で行ったことは、1番に過去問を解くということです。まず教職教養では、過去問は協同出版の『宮崎県の教職教養2026過去問』を使用しました。問題集には5年分の問題が載っていますが、私は5年分全てを解き、1回目に解いて間違えた箇所を、参考にしながらノートにまとめ、もう一度解きなおすという勉強方法を取っていました。それを何度も繰り返し5年分ともにテスト形式で行って100点満点を取るクオリティーまで仕上げました。そののちには、時事通信出版局の『教職教養30日完成2026』を用いて苦手克服学習に着手し、一つでも多く出来ないを出来るに変えていきました。

次に専門教養の勉強でも、過去問は協同出版の『宮崎県の社会2026 過去問』を使用しました。問題集には、3年分の問題が載っており私は教職教養同様3年分全てを解き、1回目に解いて間違えた箇所を、参考にしながらノートにまとめ、もう一度解きなおすという勉強方法を取っていました。それを何度も繰り返し3年分ともにテスト形式で行って100点満点を取るクオリティーまで仕上げました。そののちには、受験研究社の『中学自由自在問題集』を用いて、中学校社会の総復習を行い、自分の得意に磨きをかけていきました。両教養ともに妥協を一切許さず、分からないを分かるに変える努力を行い、着実に点数をあげていき本番では、教職教養では7割、専門教養では9割の最高の結果を掴むことが出来ました。ひとえにこの成功は、妥協をせずに努力し続けた結果ではないかなと私は感じます。「妥協を一切許さず、分からないを分かるに変えていくそんな日々の努力の積み重ねを行うことで自分の成長に繋げる」このことが1番の近道ではあると経験を通じて私は感じました。

2次試験

私が、2次試験を突破する上で行ったことは、グループディスカッション、面接、模擬授業全てにお

いて実践練習を何度も行っでは改善を繰り返すということです。人は、必ずしも最初から全てが上手くいくとは限りません。改善していき新しい自分に更新していくからこそ成長し、次第に上手くいくのです。それを2次対策では体現いたしました。

それぞれで論じていくとグループディスカッションでは、実践を行う中で自分の得意な役回りを知り得ることができました。グループディスカッションは、主に司会、タイムキーパー、書記、発表者の4つの役割のもと、議論を展開していきます。私は、練習段階で様々な役割に挑戦し、自分自身の得意を見極めていきました。その段階を経て仕上げ段階では、得意と感じた司会を何度も行って良き磨きをかけていくことが出来ました。その練習の成果もあり本番では、練習以上のパフォーマンスを発揮することが出来ました。

また面接と模擬授業に関しても実践の積み重ねを行ったことが、私自身のクオリティー向上に繋がったと感じました。面接、模擬授業双方において私自身の振る舞いや一つ一つの言葉など幾度の実践練習を通して改善していったことで多面的に気づきを得られ、その気づきを力に変えて成長していくことが出来ました。その練習の成果もあり、本番でも自分らしいパフォーマンスを発揮することが出来ました。

ひとえにこの2次試験の成功は、実践の積み重ねがあったからこそであると私は経験を持って感じました。「妥協を一切許さず、努力の積み重ねを行うことで自分の成長に繋げる。」このことが合格への1番の近道であると感じました。

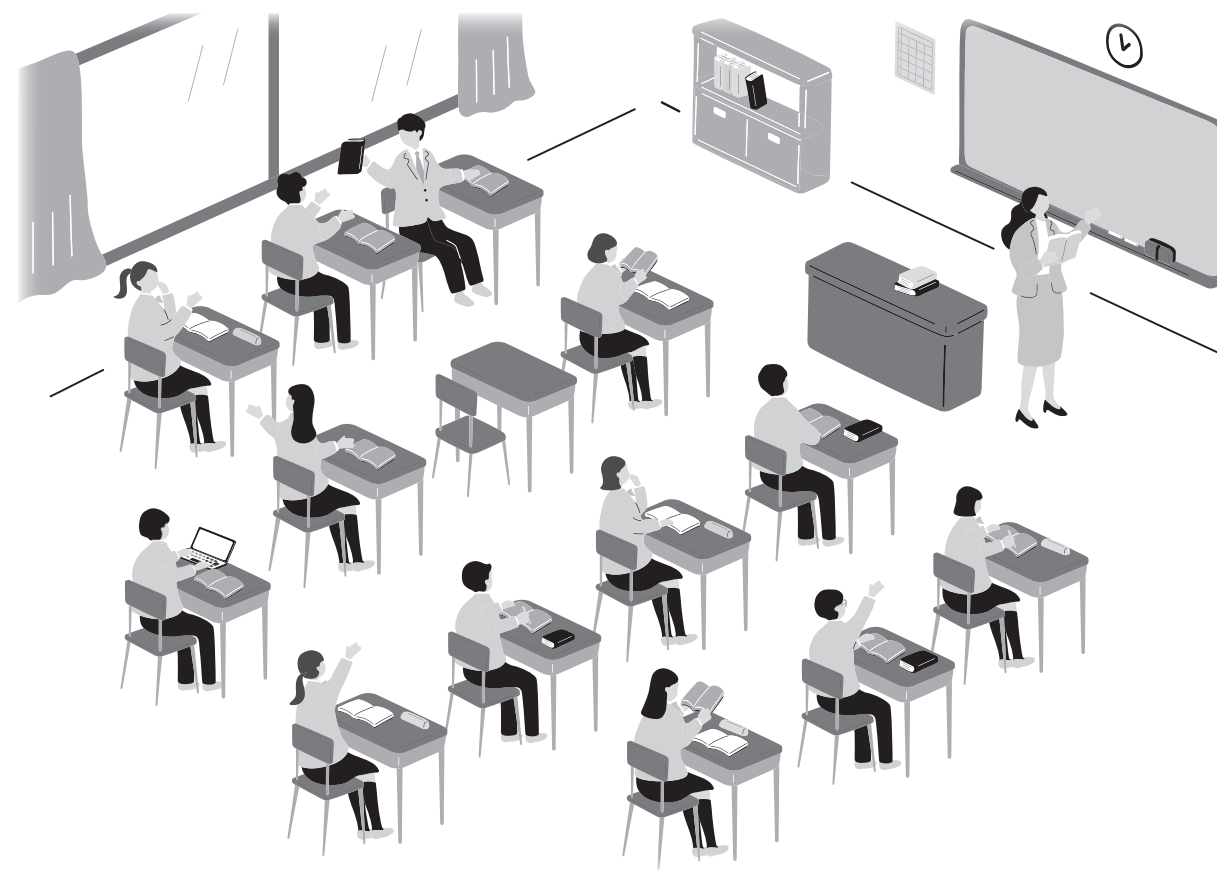
終わりに

ここまで宮崎県の教員採用試験についてまとめてきました。私の経験から1次2次ともに共通する合格への近道は、「妥協を一切許さず、努力の積み重ねを行うことで自分の成長に繋げる。」このことであると私は思います。教員採用試験は勉強期から試験日、そして合格発表まで、果てしなく長く遠いその試練の道です。その道の途中で燃え尽き症候群になってしまったり、不安な心・弱気な心に苛まれて

しまうこともあると思います。そんな時には休んで、ストレス発散をしっかりしながら、「自分の夢の為に…勉強を頑張ろう」と気持ちを切り替えながら、自分のペースで勉強に取り組んでほしいなと思います。試験日当日も周りの空気に圧倒され、緊張してしまう人も多いと思います。ただ大丈夫。自分が頑張ってきたこれまでの道筋を振り返ってみてください。「自分が一番勉強してきた」「これだけ努力してきたのだから大丈夫」など自分の過去の努力が今の自信に変わり、そして必ず強く揺るぎない力に変わります。どうか自信をもち強気で且つ平常心で試験に集中して取り組んでほしいです。宜しく願います。

最後に教員採用試験という大試練に向けて色々な対策をする中では教職の先生方・仲間、そして家族の協力が不可欠となります。一人で思い悩まず、様々な人に頼ることを大切に、自分の道を切り拓いてください。またその中で自分に関わってくださった人々への感謝を忘れず。関わってくださった皆の思いを自分自身の力に変えるつもりで心はOneteam、力強く夢への道標を辿って行ってほしいと思っています。

志す夢の為に、教職を目指す皆様の夢への道標が明るくより良いものになることを心より願っております。そして皆様のこれからの教職人生を心より応援しています。



教育実習の報告

生徒と共に学んだ教育実習

原口 優珠

(国際言語・文化学科4年)

教育実習に臨む前の不安と準備

私は2025年5月26日から6月13日までの3週間、母校の中学校で英語科の教育実習を行いました。教育実習終了の2日後には教員採用選考試験第1次試験を控えており、教育実習への不安とともに、採用試験に対する焦りも抱いていました。英語は好きで、これまで学習にも前向きに取り組んできましたが、授業中に英語をスムーズに使用できるか、生徒からの質問に即座に対応できるか、初対面の生徒とどのように関係を築いていけばよいのかなど、多くの不安がありました。また、教育実習が想像以上に忙しくなり、採用試験に向けた学習時間が十分に確保できないのではないかと心配もありました。

実習前には、教科書や学習指導要領を読み返し、単元のねらいや生徒に身に付けさせたい力について整理しました。英語科では、知識の理解だけでなく、実際に言語を使う経験が重要であるため、どの場面で生徒がつまずきやすいのか、どのような活動が効果的なのかを考えながら教材研究を行いました。しかし、机上での準備だけでは限界があり、実際の生徒の反応は授業をしてみなければ分からないとも感じていました。そのような中でも、「とにかく笑顔で、生徒一人ひとりと真摯に向き合うこと」を目標に掲げ、教育実習初日を迎えました。

授業実践を通して学んだこと

教育実習期間中、私は英語の授業を計5回行いました。

第一週目は主に授業見学を行い、学校全体の雰囲気や教師の指導技術、生徒の英語力や学習態度を把握することに努めました。英語科の授業だけでなく他教科の授業も見学することで、発問の仕方や板書の工夫、生徒への声かけなど、教科を越えて共通する指導の在り方を学ぶことができました。また、朝の会や帰りの会を担当し、クラス全体の雰囲気や生徒同士の関係性を理解することを意識しました。この期間は、全員の名前を覚え、できる限り多くの生徒に話しかけることを目標に取り組みました。

第二週目に入り、初めて英語の授業を担当しました。大学で学んだ教材研究や指導案作成を基に準備を行い、授業の流れや発問を細かく想定していましたが、実際の授業では想定通りに進まない場面が多くありました。生徒の反応を受けて即座に説明を調整することができず、結果として説明が一方的になってしまったことを反省しました。生徒の理解度をその場で判断しながら授業を進めることの難しさを強く実感しました。そのような中で、指導担当の先生から「どのような力を身に付けさせたいのか」という『めあて』を軸に授業をつくり上げることが大切である。」と助言をいただきました。また、生徒の興味関心を引き出す問いかけができていた点や、予期せぬ状況にも落ち着いて対応できていた点を評価していただき、大きな励みとなりました。これら助言を通して、完璧な授業を目指すのではなく、生徒の学びに焦点を当てることの重要性に気付かされました。第二週目は市総体の影響により授業実践の2回目を行うことができませんでしたが、その分、生徒一人ひとりの様子を観察し、日常的なコミュニケーションを通して生徒理解を深めることができました。生徒の性格や反応の傾向を把握できたことで、第三週目の授業では、より生徒に寄り添った授業展開を意識することができました。

第三週目の授業では、生徒との対話を重視した授業づくりを意識しました。特に研究授業では、「生徒が自分の考えを言葉にし、他者と共有すること」をねらいとして設定しました。そのため、教師が説明する時間を減らし、生徒同士が考えを交流する活

動を取り入れました。研究授業に向けては、指導担当の先生と相談を重ね、発問の順序や活動の流れを見直しました。また、机間指導の場面では、どの生徒にどのような声かけを行うかを事前に考えるなど、授業中の立ち位置や動きについても準備を行いました。研究授業当日は、生徒との関係性がある程度築かれていたこともあり、落ち着いて授業に臨むことができました。生徒の発言に対してすぐに評価を与えるのではなく、問い返しを行うことで考えを深めるよう心がけた結果、生徒同士の意見がつながり、クラス全体で学びを共有する場面が見られました。反省会では、授業の流れについて一定の評価をいただく一方で、時間配分や活動の整理について課題も指摘され、授業を柔軟に調整する力の必要性を改めて感じました。

生徒理解と学級への関わり

教室には多様な生徒が在籍しており、一人ひとりの性格や学習への向き合い方、背景は異なります。3週間の教育実習を通して、クラス全員と会話をする機会を持つことができましたが、短期間で生徒を十分に理解することの難しさも感じました。積極的に発言する生徒もいれば、人前で話すことに不安を感じている生徒もおり、それぞれに応じた関わり方が必要であると感じました。授業中だけでなく、朝や帰りの会、休み時間の何気ない会話の中で、生徒の表情や態度の変化に気付くことの大切さを学びました。生徒との関係づくりは特別な場面だけでなく、日常の積み重ねによって築かれるものであると実感しました。全体を見る視点と、個々の生徒を大切にする姿勢の両立を意識しながら、信頼関係を築いていくことが教員に求められる役割であると感じています。

教育実習を終えて

この3週間の教育実習を通して、教員としての役割や責任の重さを実感するとともに、教育の現場でしか得ることのできない多くの学びを経験しました。授業準備や授業実践、生徒との関わりを通して、

教える技術だけでなく、生徒一人ひとりの思いや背景を理解しながら関わることの重要性を学びました。一方で、自身の未熟さを痛感する場面も多く、今後の課題が明確になりました。また、教育実習期間中は、教員という仕事が授業だけで成り立っているわけではないことを強く実感しました。授業準備や教材研究に加え、学年や校務分掌に関する業務、生徒指導や保護者対応など、教員は常に多くの役割を担っています。その中でも、生徒の前では常に冷静に振る舞い、安心できる存在であり続けることが求められていると感じました。忙しい中でも生徒一人ひとりに目を向け、声をかけ続ける先生方の姿から、教員としての覚悟と責任感を学ぶことができました。この経験は、今後教職を志す上での大きな指針になると感じています。最終日には、生徒から色紙を贈られ、帰りの会では涙を流してくれる生徒の姿も見られました。この経験を通して、教員のやりがい、生徒と真摯に向き合い、信頼関係を築いていく過程の中にあるのだと実感しました。また、職員室や校内で温かく声をかけてくださった先生方の存在も、私にとって大きな支えとなりました。実習生として未熟な点も多くありましたが、周囲に支えられながら教育実習をやり遂げることができました。今後は、教育実習で得た学びを活かし、生徒の反応を的確に捉えながら対話を重視した授業づくりを行うとともに、時間配分や机間指導などの実践力をさらに高めていきたいと考えています。現場に立ってからも初心を忘れず、生徒と共に学び続ける教員を目指して努力を重ねていきたいです。

生徒と向き合う姿勢

三ヶ尻 拓未

(史学・文化財学科4年)

はじめに

私は母校の中学校で令和7年9月24日(水)から10月15日(水)の3週間、社会科の担当として教育実習を行った。全校生徒は880人おり、私が担当した2年生は6クラスで構成されていた。私は2年5組に配属され、社会科5回、道徳科1回の計6回の授業実践を行った。

第1週目は自分の担当する科目を中心に、さまざまな先生方の授業を見学した。第2週目からは授業実習が始まり、同時に研究授業へ向けた指導案づくりを行った。そして、第3週目には研究授業を実施し、指導教諭からいただいた助言を活かして授業改善を行った。

教育実習を通して、授業づくり、生徒理解、学級経営の三つの面で多くのことを学んだ。初めて生徒の前に立つ緊張感の中で、教師として必要な視点や技術を実感し、自分自身が目指す教員像を深く考える機会にもなった。ここでは、「授業づくりと授業実践での学び」と「生徒理解と学級経営に関する学び」の2つの視点から述べたい。

授業づくりと授業実践での学び

第1週目は担当する2年5組を中心に授業参観を行い、生徒の授業への姿勢や反応を丁寧に観察した。その中で、生徒が授業によって真剣に取り組む場面とざわつく場面がはっきりと分かれていることに気づいた。また、教師ごとに注意の仕方や発問の工夫が異なり、教師ごとの生徒の集中を維持するための授業構成や声かけの重要性を改めて認識した。授業づくりの工夫として特に印象に残ったのは、家庭科の授業でロイロノートを用いたゲーム形式の復習である。生徒が楽しみながら復習する姿を見て、社会科でも同様の形式を導入したところ、生徒が積極的に参加し、学びに対して前向きな姿勢が見られ

た。このことから、生徒が「楽しい」と感じる活動が、学習意欲向上に大きく影響することを強く実感した。また、指導教諭の授業では、プリントの統一性、補足説明の的確さ、生徒の興味を引く話題の選び方など、授業全体のデザインが非常に洗練されていた。特に、生徒との対話を通して考えを深めさせる発問の質が高く、自分の授業との違いを痛感した。そこで、私の発問の目的や行動一つひとつの意味を見直しながら授業作りを行った。研究授業に向けて、生徒へのアンケートを実施したところ、都道府県名の暗記や資料読み取りが苦手な生徒が多く、また今回の単元である中部地方についてあまり興味がない生徒が多いことが分かった。そこで、導入では地図を用いて都道府県名を答えさせ知識の定着を図り、特産物や名産品など話題を補足することで興味付けを行った。資料読み取りが苦手な生徒に対しては、個人の時間の後に必ず周りの人と意見交流する時間を設けることで、粘り強く取り組めるような工夫を行った。研究授業後の振り返りでは多くの生徒が「できた」「分かった」と書いており、授業づくりの工夫が生徒の学びに繋がったことを実感した。同時に授業を作っていく中で毎授業何か一つでも生徒の学びにつながるような授業作りを目指していこうと感じた。

生徒理解と学級経営に関する学び

1週目に校長先生から「クラス全員の名前を1週目で覚えるように」との助言があり、意識的に生徒と関わることで早い段階で名前を覚えることに努めた。2週目以降は「毎日全員に挨拶プラスワンで話しかけること」を自分の行動目標とし実践した。まずは生徒理解に努めるために、授業中だけでなく休み時間や給食、放課後の生徒の様子を観察した。さらに、毎日ノートを点検する時に3行日記から、昨日は何をしたや好きなゲームや趣味など会話のきっかけを探し、積極的にコミュニケーションを取ることを心がけた。その結果、生徒から自発的に話しかけられる場面が増えた。このことから、教師が真剣に向き合う姿勢は、生徒の姿勢にも直結することを

強く実感した。

生徒指導の面では、昇降口での挨拶運動が大きな経験となった。初日は挨拶が返ってこない場面が多かったが、生徒指導の先生から「教師が先に挨拶するのではなく、生徒から挨拶を引き出す姿勢が重要」と教わり、その意識で取り組んだところ、生徒から進んで挨拶をしてくれるようになった。挨拶は大事ということは自分の中で当たり前だったが、教員として、生徒が自分から挨拶ができるように挨拶運動を行うということは考えていなかった。どういう生徒に育てたいかが第一にあってそのために自分がどういう行動や指導をしていくかが大切だと改めて実感した。

学級経営では、合唱コンクールに向けた練習が大きな経験となった。2年5組は合唱コンクール優勝を目標に掲げ、練習に取り組んでいた。しかし、パートリーダーや指揮者が前に出てもクラスがざわつき練習が始められない場面が多く見られた。そこで、道徳の教材「ドッジボールとぼくらの温度差」を用いて、相手の気持ちを考えることや周囲の意見を聞く姿勢の大切さについて考えさせる授業を行った。授業後に、「皆は合唱練習の時に相手の気持ちを考えることはできているか」を考える時間を設けたところ、多くの生徒が行動を振り返り、次の日から指揮者やパートリーダーの指示が良く通るようになった。また、振り返りにも多くの生徒が「学んだことを合唱練習に活かしたい」と書いており、自分の思いが確かに届いたと実感することができた。

終わりに

実習を通して、教師が生徒に対して真剣に向き合えば、生徒も必ずそれに応えてくれることを学んだ。その上で「どのような生徒を育てていきたいか」を第一に考え、行動や指導していくことの大切さを強く感じた。また、現場の先生方が常に学び続けている姿勢を間近で見て、教員とは日々成長し続ける職業であることを実感した。来年度から教員として現場に立つ責任を改めて感じるとともに、この実習で得た学びを基盤として、より良い授業づくりと生

徒に寄り添った指導を実践できる教師を目指して精進していきたい。



介護等体験実習 の報告

介護等体験実習を通して 学んだこと

吉村 泰成

(史学・文化財学科3年)

私は、「指定障害サービス事業所 アルバハウス たけのこ」という施設で5日間介護等体験実習を行わせていただき、そこでさまざまなことを学ぶことができた。初日に車いすと白杖を使う方の介助の訓練をした。その際に、実際に自分自身が車いすに乗る、目を閉じて白杖をついて歩く、そして他人に身を任せ介助されるという体験をした。車いすは細かい動作は難しいし、白杖を使用して歩く際は、目を閉じると当然にも見えなくなるため障害物の有無も探りながら歩くことになる。そのため、恐怖心や不安感を大に感じた。こういった体験があったからこそ、介護される側の気持ちや恐怖、不安など身をもって感じる事ができた。

今回の実習期間で学んだなかで特に重要だと思ったことは、「相手のことを知る、知ろうとする」ということだ。実習の初日に、私と同じ施設で実習を行っていた同級生が、ハサミを使う作業の介助に入っていた時に利用者の方から厳しめに注意をされるという場面があった。ただ、この時は利用者の方は、ハサミを使う作業の中でまだ慣れてない私たちに刃物を扱っている最中に注意を促すためという優しさから厳しく注意をしてくださっていたのだと後からわかった。このような体験や実際に介助の訓練をしてみて、介助される側の気持ちを知ることができたということは、私の今後の人生にとって大きな財産となると思う。また、相手のことを知ろうとすることで、相手の行動原理や思いに気付きやすくなる。そうすると、相手にとって必要な支援や補助の

行い方もみえてくるのではないかと実習期間中に学ぶことができた。そして、相手のことを知ることで、相手にとって必要な支援や補助の行い方がみえてくるという視点をもつことは、教職を志す者としては重要であるし、介護等体験実習を通してこういったことが学べたのは非常に良かったと感じている。

また、施設の利用者の皆様はとてもあたたかく、優しい方が非常に多かった。5日間の実習の主な内容は、作業所の利用者の方の作業中の補助に入るといったものだった。その際に様々な方と一緒に作業をしたが、皆さんとてもまじめに作業をされており、作業のコツやアドバイスなど私の話をよく聞いてくださった。そのため、教える側としての責任の重さということも身をもって学ぶことができた。利用者の皆様は異なる障がいがありつつも、施設のなかで役割分担をしていたり、作業においても分業していたりと、一つの共同体のようなものを形成していた。それはまるで一つの社会であり、その社会の中の一員として、他の利用者の方や実習に来ていた私たちを気遣ってくださっていて、誰かの役に立ちたいという思いが一人ひとり、それぞれにあるのだと感じた。

特別支援学校での 学びを通して

植田 美加

(国際言語・文化学科3年)

私は、大分市にある大分県立新生支援学校において、令和7年10月21日から10月22日までの2日間、介護等体験実習をさせていただいた。本実習では、特別支援学校という教育現場に身を置き、児童一人ひとりと関わりながら学校生活を共にする中で、多くの学びと気づきを得ることができた。

1日目は5年2組に入り、児童と1日を共に過ごした。朝は受付や着替えを済ませた後、オリエンテーションや学校見学を行い、その後、教室での活

動や交流に参加した。実習当初は、どのように声をかければよいのか、どの距離感で関わるべきなのかわからず、不安や緊張を強く感じていた。しかし、児童たちが自ら話しかけてくれたり、活動に誘ってくれたりする中で、次第に緊張は和らいでいった。こちらが構えず、自然体に関わることで、児童との距離が縮まっていくことを実感した。

活動の中では、児童一人ひとりの特性やペースが大きく異なり、それに応じた関わりが求められていることを強く感じた。同じ活動であっても、声かけの仕方や関わるタイミングを変えることで、児童の反応が大きく変わる場面を何度も目にした。特別支援学校では、集団の中にながらも、常に「一人ひとり」に目を向けた支援が行われており、その丁寧さがとても印象に残った。

2日目は、5年生全体と関わりながら、文化祭に向けた準備や練習、介護等体験を中心に活動した。学年全体での活動では、個人での活動とは異なり、友だちと協力しながら一つの目標に向かう姿を見ることができた。教員の方々は、全体の流れを大切にしつつも、個々の様子を細かく見取り、必要に応じて支援の方法を変えておられた。

特に印象に残っているのは、自立活動の場面である。私は児童の行動に対して「間違っている」と感じ、すぐに声をかけてしまったが、後から教員の方より「まずは様子を見ることも大切である」とご指導いただいた。時間がかかっても、自分で気づき、修正していく経験こそが成長につながる場合もあるということを、この場面を通して学んだ。支援とは、すぐに手を差し伸べるだけでなく、見守ることも含まれるのだと気づかされた瞬間であった。

今回の実習を通して、特別支援学校は、私がこれまで抱いていたイメージとは良い意味で大きく異なっていた。一人ひとりが自分の成長と真剣に向き合い、その過程を教員が丁寧に支えている姿が印象的であった。特別支援学校だからこそ、児童一人ひとりに深く寄り添い、その成長を間近で見守ることができる環境が整っていると感じた。

私は将来、「家庭以外で1番、生徒の成長に寄り

添うことのできる教員」になりたいと考えている。今回の介護等体験実習を通して、その思いはより一層強いものとなった。教員の役割は、知識を教えることだけではなく、生徒の成長の過程を信じ、共に歩み続けることである。今回得た学びを、今後の教職課程での学習や教育実習に生かし、生徒一人ひとりの成長に真摯に向き合える教員を目指していきたい。



教育実習で 作成した指導案

第2学年 英語科 学習指導案

授業者 菅原 みなみ

実施日時 令和7年6月12日

実施学級 2年2組38名

1. 単元名 My Dream (NEW CROWN English Series Lesson 3)

2. 単元について

(1) 教材観

本単元では、職場体験学習でのやりたいことについての対話、目的などを話す対話を聞き、概要を捉え、簡単な語句や文を用いて文章をつくる。本単元の文法事項として、不定詞の名詞用法、副詞用法、形容詞用法、「義務」「禁止」を表す助動詞mustについて取り扱う。さらに教科書の音声を使いながら、ペアワークなども取り入れ、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」及び「書くこと」による実践のコミュニケーションにおいて活用できる「技能」を養う。

(2) 生徒観

本学級の生徒は、明るく元気な生徒が多く、ペア活動では活発にやり取りをする姿が多く見られる。一方で、文章をつくるときにあまりペンが進まない生徒が見られるため、文章を書くことが課題であると考えられる。

(3) 指導観

本事項を学習することで自分の将来の夢ややりたいこと、何かをする目的を話すことができるようになるため、表現の幅を広げることが可能である。以上のことを踏まえて本単元では、不定詞の名詞用法、副詞用法、形容詞用法および助動詞mustを学習し、文法の理解とともに簡単な語句や文を用いて、まとまりのある会話をする能力を身に付けさせたい。

3. 単元の目標

- 自分の将来の夢ややりたいこと、何かをする目的についての文法事項を理解する。
- 自分の将来の夢ややりたいこと、何かをする目的について、相手に伝えることができるようになる。
- 不定詞や助動詞mustを使って、相手との会話に主体的に取り組む。

4. 関連する学習指導要領における領域別目標

話すこと (やり取り)	イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。
----------------	--

5. 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
〈知識〉 ①to 不定詞（名詞用法）の特徴や決まりに関する事項を理解している。 ②to 不定詞（副詞用法・形容詞用法）の特徴や決まりに関する事項を理解している。 ③must…/must not…の意味や働きを理解している。 〈技能〉 ④to 不定詞などを用いて、将来の夢や特定の行動について、自分の考えを伝え合う技能を身につけている。 ⑤ルールについて、must…/must not…などを用いて、事実や自分の考えなどを伝え合う技能を身につけている。	自分が理解したことを相手に伝えながら、トークテーマについて、即興で伝え合ったり、質問に応答したりしている。	①積極的に自ら、発言をしたり、音読をしたりする姿勢がある。 ②自分が理解したことを相手に伝えながら、トークテーマについて、即興で伝え合ったり、質問に応答したりしている。

6. 指導と評価の計画

時間	学習活動	知	思	態	評価規準【評価方法】
1	・不定詞の名詞用法について知る。 ・職場体験に関する文章を読み取る。	○		○	・授業観察
2	・不定詞の名詞用法について理解する。 ・自分の夢ややりたいことを英語で表現する。	○	○		・授業観察 ・ワークシート ・ペアワーク
3	・不定詞の副詞用法と形容詞用法について知る。 ・パン屋に関する文章を読み取る。	○		○	・授業観察
4 本時	・不定詞の副詞用法と形容詞用法について理解する。 ・副詞用法と形容詞用法を使って、説明文をつくる。	○	○		・授業観察 ・ワークシート
5	・助動詞mustについて理解する。 ・やらなければいけないことや、やってはいけないことを英語で表現する。	○	○		・授業観察 ・ワークシート
6	・『捨てないパン屋』についての概要を捉える。	○			・授業観察
7	・『捨てないパン屋』についての考えや意見を英語で表現する。	○	○		・授業観察 ・ワークシート

7. 本時案（4／7）

(1) 題目 「to＋動詞の原形」を使って、クイズをしよう。

(2) 本時の狙い 不定詞の副詞用法・形容詞用法について、モノや場所を説明し合う活動を通して、理解し、使えるようになる。

(3) 評価規準 不定詞の副詞用法と形容詞用法の文法事項を理解し、班で協力しながら活動が出来ている。

(4) 展開

時	学習内容	指導上の留意点	備考
2 8 30	【導入】 ・Greeting 【復習】 ・ワークシートの基本文とポイントを確認する。 【展開】 本時のめあて 「to＋動詞の原形」を使って、クイズをしよう。	・日常に関することを英語で会話する場を設けることで、英語の学習に対する意欲を高める。 ・パワーポイントで意味を確認する。	・日付、曜日、天気などの質問に答えられている。
	・例文を提示する。 ・班を作り、お題に沿った説明文を2文程度作る。(12分程度) ・各班の文章を電子黒板に提示し、内容を発表する。 ・何についての説明文なのか予想し、不定詞の意味について捉える。	・何について書いているか予想させる。 ・不定詞を使った文章をつくることを指示する。 ・お題は各班長のロイロノートに送る。 ・使えそうな表現をパワーポイントで提示しておく。 ・副詞用法または形容詞用法が使えているか、机間指導をしながら確認する。 ・各班すべての文章を発表してから、正解を確認し、正解確認後、文法を見ていく。	・不定詞を使うことができている。 ・不定詞に気づき、理解できている。
5	【終末】 ・不定詞の副詞用法と形容詞用法について振り返りを行う。	・もう一度副詞用法と形容詞用法の意味を押さえておく。	



教育実習 第3学年 国語科学習指導案

授業者 田中 龍希
実施日時 令和7年9月26日(金) 3校時
実施学級 3年3組38名(3の3教室)

1. 単元 「複数の意見を読んで、考えようー正解が一つに決まらない課題と向き合うー」(光村図書 国語3)

2. 単元目標

- 自分の生き方や社会との関わり方を支えることの意義と効用について理解できる。
[知識及び技能(3)オ][情報の扱い方(2)ア]
- 文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。
[思考・判断・表現][C読むこと(1)イ]
- 言葉がもつ価値を認識するとともに、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。
[学びに向かう力、人間性等]

3. 単元設定の理由

- (1) 教材観
実生活で身近な環境問題、またそれに伴う情報を誰もが容易に入手できる。しかしながら、多くの生徒はそれらの情報に対して受動的であり、自分の考えを示す機会は少ない。本単元では文章を批判的に読み、課題解決に向けて自分の考えをもつことを目的としている。
情報を得る過程で、全ての情報を鵜呑みにすることは極めて危険である。複数の文章を読み比べる活動を通して、他者の価値観や主張、話題の具体性など様々な観点から吟味・検討することができるだろう。また、その中で自分なりの考えを相対化する機会も生まれる。本単元の活動の中では、「読むこと」の資質・能力を育成するだけでなく、批判的読解を通じて将来の社会生活や民主的な議論に必要な力を培うことができると考える。

- (2) 生徒観
生徒は第二学年時に、目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、文章と図表などを結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈してきた。3年3組33名に情報への信頼・態度を問うアンケートを行ったところ、AIやインターネットで情報を調べる際、一度本などで確認しないことがある。／調べた情報が「本当に正しいか」と疑ったことがない。という問いでは、それぞれ「よく当てはまる／どちらかと言えば当てはまる」と答えた生徒は前者が[54.5%/24.0%] 後者は「9.1%/21.2%」であった。簡単にまとめると、情報の正確性を疑う姿勢を持つ生徒は多いものの、書籍などの他の媒体と比較しながら情報を得る生徒は少ないように思える。この単元を行うことは批判的思考力を養うのみならず、情報の精査の必要性について考え直す良いきっかけとなるだろう。

- (3) 指導観
本単元では、「身近な環境問題の解決には、何が必要か」という問いを設定し、問題解決意識を持たせながら文章を読む活動に取り組ませたい。指導にあたっては複数の提言に対してその特徴や違いを吟味すること、批判

的に文章を読むことによって、最終的には自分の考えを持って問題解決していくことの重要性を理解させられるようにしたい。そのような姿を目指す上で、以下の支援をしていく。

- ①この単元では批判的読解が求められるが、教科書を通読させる前に、特に文章読解においては単に論者を否定するのではなく、疑問を抱きながら読む等といった「否定」と「批判」の違いについて説明する。
- ②三人の筆者の特徴を比較する場面では提言の要旨に加えて、論理の展開など様々な観点に着目させる。そうすることで、表にまとめた際にそれぞれの特徴を比較しやすくなる。
- ③課題に対する振り返りの際は、学習の結果に加える形で学習の過程（筆者のどの点に着目したか、評価を行う中で何を感じたか等）も記述させる。

これらの取り組みを通し環境問題の解決という大きなテーマに対して自らの知識と思考をどのように用いるべきか、そのように至った過程も含めて批判的読解の成果が得られると考える。

4. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文章を読み比べ、自分の生きる社会について深く考えるきっかけとなることに気付いている。	文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えている。	複数の意見を比較しつつ、その提言に対する評価や議論を経て自分の考えを明確にまとめられている。

5. 単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点	評価方法
1	○目標を確認し、学習の見通しを持つ。 ○班ごとに上げる筆者を決め、教科書を通読しつつ提言の要旨を模造紙にまとめる。	・学習の見通し（課題意識）を持たせる。 ・批判的に文章を読むよう指導するが、この時「批判的読解」と「論者の否定」を履き違えないよう注意させる。 ・班で活動する際には役割分担を各自で行わせる。	◇文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えている。（思考・判断・表現）
2	○前時で整理した要旨をクラス全体で共有する。 ○提言の評価方法について学ぶ。	・生徒が記したワードを用いつつ、黒板にまとめる。 ・提言の内容だけでなく、筆者の表現の仕方などにも注目させる。 ・次時の活動に向けて、評価の説明は丁寧に行う。	◇文章を読み比べ、自分の生きる社会について深く考えるきっかけとなることに気付いている。（知識・技能）
3	○提言の要旨をもとに、三人の筆者の評価付けを行う。	・自分の考えをまとめる際は、筆者のどの部分に共感、あるいは反感したかを補足づけるよう指示する。	◇複数の意見を比較しつつ、その提言に対する評価や議論を経て自分の考えを明確にまとめられている。（主体的に学習に取り組む態度）
4	○「環境問題の解決に必要なこと」について自分の考えをまとめる。（個人） ○この単元で学んだこと、また今後の生活にそれをどのように活かしたいか振り返る。	・振り返りの際は、文章を読むとき／評価するときに注意した点等を書かせる。	◇複数の意見を比較しつつ、その提言に対する評価や議論を経て自分の考えを明確にまとめられている。（主体的に学習に取り組む態度）

6. 本時案（4／4）

- （1）題材 「複数の意見を読んで、考えようー正解が一つに決まらない課題と向き合うー」
- （2）ねらい

○複数の提言を比較しつつ、その提言に対する評価や議論を経て自分の考えを明確にまとめることができる。

（3）展開

過程 配分時間 (分)	学習活動	指導上の留意点	評価（方法）
導入（6）	1. 前時の振り返りをした上で、本時の目標を確認する。	○評価する際に意識したポイントを思い出させる。	
	めあて：「筆者の評価をもとに、自分の考えをまとめよう」		
展開 (2)	2. 環境問題の解決に必要なことについて、隣席とペアワークを行い考える。	○前時に取り組んだ筆者の比較表や、ノートに記した筆者の評価をもとに考えさせる。	〈活動の様子〉 ワークシートは授業後に回収し、評価を行う
(2)	3. 生徒の考えた意見を発表させる。	○筆者の主張と少なからず関連があるか確認する。	
(15)	4. 「環境問題の解決に必要なこと」について自分の考えをまとめる。	○自分の考えをまとめる際は、筆者のどの部分に共感、あるいは反感したかを補足づけるよう指示する。	
(8)	5. 班でグループワークを行い、考えを共有する。	○班員から得られた新たな解釈や視点があれば、ノートに付け加えるよう指示する。	
(6)	6. これまでの活動を通して、学んだことと今後に活かしたいことを記入する。	○批判的読解というワードを今一度確認し、複数の情報を読み取る上での重要性を今一度理解させる。	
終末（6）	7. 本時の振り返りを行う。	○学級全体で振り返りを共有する。	〈活動の様子〉 発表／聞く姿勢
	振り返り：批判的読解により自分の考えを深めることができた。		



第1 学年社会科学学習指導案

授 業 者 大野 主博
実施日時 第2校時
実施学級 1年4組29名

1 単元名 「第2章 古代までの日本 2節 日本列島の誕生と大陸との交流
1、2 縄文時代の暮らしと弥生時代の暮らし」

2 単元設定の理由

- (1) 生徒観
- 本学級の社会科における授業では、生徒は活発で班活動やペアワークに積極的に参加する生徒が多い。一方で、意見は持っているが全体での発言に繋げることが得意でない生徒が多くみられる。そこで、班活動を取り入れ意見を確認し自信を持たせることが必要である。加えて、第1学年であるために集中力が続かないこともあるので時間の管理と学習環境づくりに留意する。また社会の学習については、歴史の大まかな流れや事象については小学校段階でも学習を重ねてきており、歴史に対する興味は高く、人物に対する好奇心も多く歴史好きな生徒が多い。その中で資料からの読み取りは、これまでの学習でも行なってきたが、複数の時代を比較し社会の変化に気づくという経験は少ない。
- (2) 教材観
- 本単元は中学校学習指導要領の歴史的分野A「歴史の対話」の内容中項目(1) 私たちと歴史(イ)に該当する。本単元を通して生徒に学ばせたいことは日本における大陸との関わりと国家形成の歩みである。その中でも、縄文時代から弥生時代の暮らしの中で大きく変化したこととして、大陸から稲作が伝わり狩猟・採集中心の生活から農耕中心の生活になったことがあげられる。狩猟・採集から農耕に移り変わったことにおける村の様子・人々の様子・建物、道具の変化を認識し、大陸からの影響が日本の社会をどう変化させたか理解することで、今後の日本の国家形成にどのような影響を与えたのかという理解に繋げることができる単元である。
- (3) 指導観
- 社会科の授業を行っていく上で1番重視していくことは、生徒と対話をして行うということである。1年生で集中力がなかなか続かない中で授業に向かわせる上で、生徒の対話中心で活動を行う。その際に、縄文・弥生時代における社会の比較に取り組ませる。縄文と弥生の比較を行い日本における大陸からの影響がどのようなものであったかということを生徒に捉えさせる活動を行う。さらに、考えを促進するために班活動で教え合うことや、振り返りにおいて自身の生活をそれぞれの時代に置き換えて考えることで時代ごとの生活の様子を考察し、表現させる。

3 単元の目標

- 日本列島における農耕の広まりと生活の変化や当時の人々の信仰、大和政権による統一の様子と東アジアとの関わりなどを基に東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていく過程を理解させる。

4 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
日本列島における農耕の広まりと生活の変化や当時の人々の信仰、大和政権による統一の様子と東アジアとの関わりなどを基に、東アジアの文明に影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを理解できる。	農耕の広まりや生産技術の発展、東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化に着目して、事象を相互に関連づけるなどして日本列島における国家形成について、古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現できる。	日本列島における国家形成について、ここで見られる課題を主体的に追究、解決しようとしている。

5 指導と評価の計画(全4時間)

単元を貫く課題：日本列島は大陸からどのような影響を受け変化していったのだろうか

	ねらい	主な学習活動・内容	評価基準と評価方法
第一次	日本列島における旧石器時代の人々の生活の様子を理解する。	旧石器時代と縄文時代の暮らし	資料から、日本列島で狩猟・採集の生活を行っていた人々の生活の特徴について理解している。
第二次 本時	縄文時代・弥生時代の人々の暮らしを当時の社会状況と合わせて理解し、大陸から受けた影響と関連づけることができる。	縄文時代の暮らしと弥生時代	縄文時代・弥生時代の人々の暮らしの特徴を当時の社会文化と関連づけて考察し、表現している。
第三次	弥生時代に日本の国家が形成されていく過程について、東アジアとの関わりに着目して考察し表現する。	国々の成立と邪馬台国	文献などから、国家が形成されていく過程について大陸の影響に着目しつつ考察し、表現している。
第四次	大和地方を中心とした大和政権の勢力が拡大していったことを理解する。	大王の時代	大和政権の勢力が拡大されていく過程を、古墳の分布や鉄剣などの史料を通じて理解している。

6 本時案

- (1) 題目「縄文時代と弥生時代の社会にはどのような違いがあるだろうか」
- (2) 本時のねらい
- 縄文時代と弥生時代の人々の暮らしを当時の社会状況と合わせて理解し、大陸から受けた影響と関連づけることができるようにする。
- (3) 展開

時間	主な学習活動・内容	教師の指導・支援	備考(評価等)
3分 導入 10分	1 用語の復習(ペアワーク) 2 写真を映して振り返りを行う(縄文土器、貝塚、竪穴住居、等)	○机間指導を行い活動の確認、発展をさせる ○縄文時代と弥生時代を代表とする社会の様子を映し知識の確認を行う ・生徒と対話形式で行い生徒から意見を引き出す活動であることとする。 ・話の方向性に留意する。	
めあて：縄文時代から弥生時代の人々の生活の変化を衣・食・住に着目して説明できるようになろう			

展開 22分	3 教科書の資料からそれぞれの時代（縄文／弥生）の特徴を読み取る （人々の様子、村の様子、建物、道具、その他気づき）	○個人で考える時間 班で考える時間 生徒に発表させる（班）	・議論を積極的に行いプリントに活動の記録を残しているか。（主学態）
	課題：縄文時代から弥生時代にかけて人々の生活が変化した理由を考えよう		
	4 動画と資料から生活の変化を読み取る	○机間指導を行い班の意見や個人の意見で良い意見を探し、さらなる問いを与え議論を深めさせるものとする ○大陸から稲作が伝わったことを理解させる	
10分	まとめ：縄文時代では狩猟・採集中心の生活で、弥生時代は大陸から稲作が伝わったことで農耕中心の生活に変化した		
	5 まとめ	○生徒が理解を深めることができるように適宜内容復習の声かけを行う	・縄文時代、弥生時代における特徴を自身の生活に置き換えて考え、それぞれの時代の特徴を含め自身の考えを表現することができるか。（思・判・表）
	6 振り返り	振り返り：縄文時代から弥生時代にかけての大陸からの影響による人々の生活の違いにはどのようなものがあったか説明しよう	

7 板書計画

めあて――

縄文時代から弥生時代の人々の生活の変化を暮らし・食、建物、道具に着目して説明できるようになろう。

縄文

弥生

課題――

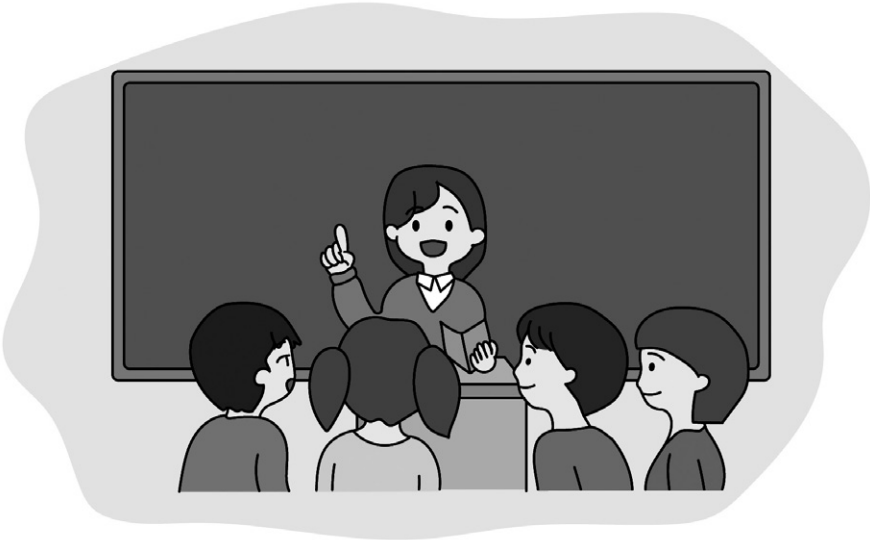
縄文時代から弥生時代にかけて人々の生活が変化した理由を考えよう。

稲作→大陸から伝わった

まとめ――

縄文時代では狩猟・採集中心の生活で弥生時代は大陸から稲作が伝わったことで農耕中心の生活であった。

振り返り――



卒業後の私

小野 郁夜

(令和4年3月 食物栄養科学部 発酵食品学科卒業)

臨時講師として学んだこと

大学を卒業したばかりで右も左も分からない中、四月の二週目から生徒たちの前で一人の教師として話をする立場になりました。生徒たちとともに生活していく中で、授業ももちろん大切ですが、それ以上に日常生活の決まりを指導することの大変さを実感しました。例えば、登校時間や服装、挨拶の仕方など、授業以外の場面で生徒の様子を見守り、できていない生徒にはその都度指導を行う必要がありました。しかし、教員間で共通理解ができていないと、「あの先生はいいと言っていたのに」と、生徒の中に疑問や不満が生じてしまいます。子どもたちが安心して過ごせる学校づくりのために、学校の仕組みや校則を正しく把握することの難しさを感じました。そんな生活の中で特に印象に残っている出来事が二つあります。

一つ目は、同じ教科を担当する先生からのご指導です。臨時講師という立場上、他の先生方に授業を見ていただく機会は限られた回数しかありませんでした。その一つの授業を参観していただいた後、「誰のために授業をしているのか」「どのような目的があるのか」「生徒の表情をどれだけ見ているか」など多くの点について指摘を受けました。当時の私は、「とりあえず教えなければならないことを伝えなければ」という思いが強く、ただ内容をこなすだけの授業になっていました。本来、生徒たちに伝えたかったのは、「理科って楽しい」「分かるとおもしろい」という気持ちであり、理科という教科を好きになってほしいという思いでした。その後は、目的を明確にもち、生徒が楽しく理解できる授業を目指して努力しています。まだまだ課題は多くありますが、常に学び続ける教員でありたいと思っています。

二つ目は、学年長の先生からかけられた言葉です。四月初めに学級通信を作成した際、保護者へのメッセージ欄に「まだ分からないこともありますので、気になることがあればいつでもご連絡ください」と書きました。それを見た学年長の先生から、「それは『自分は若いからミスをしミス』という保険をかけているのではないか」と指摘を受けました。一人の教員として、大人として生徒の前に立つ以上、新人かベテランかは関係ありません。この言葉で自分の甘さに気づかされました。若いからミスをしてもいい、若いから分からないことがあって当然だと考えてしまいがちですが、生徒にとっては全員が「教員」であり、立場の違いは関係ありません。生徒の大切な一年間を共に過ごす立場として、「自分にはできない」といった理由は通用しないのだと学びました。生徒がどんなことでも安心して相談できる、自信に満ちた教員として見られるように振る舞うことの大切さを実感しました。

現在のお仕事について

私は現在、中学校で勤務をしています。前任校とは少し異なる校則や共通のルールもあるため覚えることはたくさんありますが、新しい環境でいろいろな刺激を受けながら楽しく働いています。この半年間で学んだことは「あだ名」についてです。私は「あだ名」とは相手との一定の関係があり、お互いに同意の上ならしてもいいものだと思っていました。また生徒にもそのような話をしていました。その結果、私のクラスは悪意のあるあだ名が飛び交うようになりました。私自身が考えていたものとはまったく違う状況でした。そのときに「あだ名」そのものがよくないものである。と気づかされました。「あだ名」は同意のもとで呼び合っても、結局はどこかで嫌な思いをする人がいて、我慢をしないといけない人がでてくる。そもそも「あだ名」を言う必要はないのです。その後クラス全体に話をし、少しずつ減ってはいきましたが、今でもたまに聞こえることがあります。これからクラス担任となる方に意識してほしいのは、最初のルールづくりです。最初にしっかりと固め、常にルールを破ることを許さない姿勢が大切です。

教職課程履修者へのメッセージ

みなさんは教員を目指して教職課程を履修していますか。それとともりあえず取っておこうという考えですか。いろんな目的で教員免許を取ろうとしていると思いますが、自分は教員しか経験していないので、ほかの仕事がどのくらいキツイとか楽しいとか何も知りません。しかし、教員という仕事を経験して、また、違う仕事をしている友達の話聞いて、共通して言えるのは、その仕事に対してやりがいを感じていることが重要だと思います。自分は生徒たちと話をするのが楽しいと感じますし、学校に行きたくない思いながら、学校で生徒たちと何気ない会話の中をすると、「今日も学校に来てよかった」と思えます。この仕事でなければいけないという理由はどこにもないと思いますが、少しでも教員という仕事に興味があれば、一度経験してみるのも良いかもしれません。もちろん大変ですし、中途半端な気持ちで生徒たちの前に立つことは許されません。その中でやりがいを見出すことができるのであれば、ぜひ一緒に教員という同じ仕事を頑張っていく仲間になれたらと思います。今は大学生活を目いっぱいいたのしみながら、勉強も少しずつ頑張ってください。



参考資料

CONTENTS

1. 教育実習事前の諸注意	36
2. 「義務教育教員免許志願者に対する 介護等体験実習」実施要領	38
3. 令和8年度 大分県公立学校 教員採用選考試験 総合結果	39
4. 過去5ヶ年の教育職員免許状取得状況	40
5. 別府大学教職課程履修プロセス	41

教育実習に行くには、次のような条件を満たしている必要があります。

「教育実習」を履修するための条件

- ①教員になる強い意思を有していること
- ②教養科目および専門科目は、100単位以上修得していること
- ③教科及び教職に関する科目は、各教科教育法または学校栄養指導論の科目を除いて、10単位以上を修得していること
- ④原則として、「教職論」、「教育課程論」、「教育方法論（ICT活用を含む。）」（栄養教諭免許状取得者は、「道徳の理論・総合的な学習の時間の指導法および教育方法論」）、「発達心理学」、「特別支援教育論」及び、各教科教育法または学校栄養指導論の単位を修得していること
- ⑤『教職履修カルテ』が作成・管理されていること
- ⑥3年次終了時の通算GPAが、2.000以上であること
- ⑦教育実習生としての資質・能力をもっていること

教育実習に行く前に、以下の諸注意をよく読んで、必ず守るようにして下さい。守れない場合は、教育実習を辞退してもらうことになります。

実習に臨む姿勢について

- ・ただ指示を待つだけではなく、実習期間中、すべての教育活動に積極的に参加すること。
- ・いわゆる両立をしている場合には、実習期間中、就職活動（企業訪問や就職試験・面接など）は、実習校に迷惑がかかるので入れないこと。また、就職活動をしていることも公にしないこと。
- ・実習には不安や失敗はつきものである。誠意を持って全力で実習に取り組み、それを克服することができるように努力すること。

指導教員との関係について

- ・分からないことがあったら、指導教員に積極的に指示をあおぎ、指示されたことはきちんと実行すること。
- ・指導教員との間に良好な信頼関係が形成されて初めて、実習は円滑に進んでいき、実り豊かなものとなる。そのためには、指導教員や学校側の指導助言に謙虚に耳を傾け、その学校の教育方針に従うこと。
- ・必ず指導教員に連絡を取った上で、実習校を事前に訪問し、実習に必要な準備物や内容を確認しておくこと。
なお、特に教材研究と指導案作成については、できるだけの準備をし、きっちり書けるようにすること（学校によっては、準備不足を指摘する声が例年ある）。

教員としての行動について

- ・実習期間中は「学生」としてではなく、「教員」として行動すること。
- ・犯罪などの反社会的行動は行わないことは当然であるが、通勤途中や学校外での交通事故等にも気をつけること。
- ・特定の政治的行動や宗教的活動を行わないこと。
- ・実習期間中に知り得た職務上の秘密事項（児童・生徒の家庭環境、病歴など）については、実習後も絶対に他に漏らさないこと。

服装やマナーについて

- ・教育実習生には、社会人として当然の常識的なマナーが求められているので、教育実習生としてふさわしい態度や行動をとること。
- ・実習先の児童・生徒や他の教員に対して、違和感や不快感を与えることがないように清潔な身だしなみを心がけること。
- ・頭髪は染めない。
- ・厚化粧や派手なマニキュア、華美な服装は慎むこと。
- ・耳などにピアス等はしない。
- ・サンダル履きはしない。
- ・言葉遣いは丁寧にすること。
- ・常に明るい挨拶を心がけること。
- ・決められた時間や約束は、きちんと守ること。遅刻は絶対にしないこと。
- ・喫煙は、学校内では絶対に行わないこと。
- ・学校内に携帯電話を持ち込まないこと。
- ・板書や実習ノート記入の際に、漢字の筆順や、誤字・脱字に注意すること。

児童・生徒への接し方

- ・実習期間中は、学生ではなく教員であり、教員として児童・生徒に接すること。
- ・クラスには様々な個性を持った子どもがいる。全児童・生徒が、何らかの形で実習生に関心を抱いていることを忘れないこと。
- ・自分に対して親しみを持ったり、なついてきたりする児童・生徒だけでなく、児童・生徒一人ひとりに対して愛情を持って、公平に接すること。
- ・実習期間中及びその前後において、SNS等で個人的なやり取りをしないこと。さらに、児童・生徒と個人的に会ったりするようなことは絶対にしないこと。

＊なお、教育実習期間中及びその前後において、「スクール・セクシュアル・ハラスメント防止に関する指針」（大分県教育委員会 令和6年6月改正）、「教育公務員に適用する懲戒処分の指針」（文部科学省、平成30年12月）に示される禁止事項を行っていることが判明した場合には、教育実習の単位を「不可」とすることがある。これらの指針を確認して教育実習に臨むこと。

1. 趣 旨

義務教育に従事する教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性に鑑み、教員の資質向上及び学校教育のいっそうの充実をはかる観点から、小、中学校教諭の普通免許状取得希望者に関係法令（「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」）に基づく介護等体験実習を実施する。

2. 事前指導ならびに申し込み

別府大学・別府大学短期大学部では、介護等体験実習を希望する学生を対象に、事前指導を行っている。事前指導では、介護等体験の意義・目的や実際の介護等体験に関わる技術、心得ておく事柄等に関して、講義や説明が行われる。

学生は、介護等体験実習の事前指導が始まる年度の前年度後期に実施される大学での説明会において申し込みをすることができる。この説明会は 1 月中旬か下旬に実施される。これに基づいて大学は、「介護等体験実習希望者名簿」を作成し、大分県教育委員会及び大分県社会福祉協議会に一括して提出する。その後受け入れが決定され、各学生に通知される。

3. 介護等体験実習実施期間

原則として、大学 3 年次・短大 1 年次の 5 月から翌年の 3 月までの間に実施され、特別支援学校で 2 日間、社会福祉施設等で 5 日間とする。

4. 介護等体験実習の内容

◆特別支援学校（2 日間）

- 障がい児に対する介護、介助
- 遊び等を通しての交流体験
- 運動会等の行事の手伝い
- 教材・教具の作成・整理補助等

◆社会福祉施設等（5 日間）

- 高齢者、障がい児等に対する介護、介助、話相手
- 散歩の付き添いなどを通じての交流活動
- レクリエーションや運動会等の行事の手伝い
- 掃除、おむつたたみ等の施設職員の業務の補助
- その他、受け入れ先の社会福祉施設で考えられること

5. 証明書について

各介護等体験実習先で発行された証明書を大学に提出し、卒業年次の免許状申請の際に添付する。

令和 7 年 8 月 2 9 日

（単位：人、倍）

試験区分	採用予定者 数	延べ出願者 数	出願者のうち 1次免除者数	第1次試験 受験者数	第1次試験 合格者数	第2次試験 合格者数	補欠合格者 数	実質倍率 (a+b)/(c)	昨年度	
									合格者数	実質倍率
小 学 校 教 諭	170	250	4	230	203	170	10	1.4	160	1.3
小中学校連携教諭	10	24	1	21	6	4	1	5.5	4	3.5
算 数・数学	2	7	0	6	0	－	－	－	－	－
理 科	2	2	0	2	1	0	0	－	－	－
音 楽	2	4	0	3	2	2	0	－	－	－
保 健 体 育	2	4	0	4	0	－	－	－	2	1.5
英 語	2	7	1	6	3	2	1	3.5	2	3.5
中 学 校 教 諭	120	344	43	283	160	107	44	3.0	105	2.8
国 語	24	31	0	30	19	16	0	1.9	20	1.6
社 会	17	58	14	40	34	17	10	3.2	20	2.9
数 学	10	45	3	41	20	10	10	4.4	10	3.2
理 科	15	15	1	14	12	13	0	1.2	13	1.2
音 楽	7	23	6	15	12	7	9	3.0	6	3.5
美 術	6	15	0	13	6	5	0	2.6	3	2.3
保 健 体 育	12	103	16	83	25	12	10	8.3	13	6.8
技 術	6	5	0	5	5	4	0	1.3	2	1.0
家 庭	3	7	0	5	4	3	1	1.7	3	3.3
英 語	20	42	3	37	23	20	4	2.0	15	2.0
高 等 学 校 教 諭	68	346	48	279	126	61	64	5.4	53	5.8
国 語	6	28	5	22	10	6	7	4.5	5	4.0
世 界 史	1	7	2	5	4	1	2	7.0	1	13.0
日 本 史	1	11	3	7	4	1	1	10.0	1	10.0
地 理	2	11	1	10	6	2	4	5.5	2	5.0
公 民	1	10	2	7	5	1	2	9.0	1	6.0
数 学	9	50	9	40	18	9	10	5.4	9	4.9
物 理	3	18	4	13	9	3	6	5.7	2	8.0
化 学	4	6	2	3	3	4	0	1.3	3	3.0
生 物	3	9	1	8	7	3	4	3.0	2	3.0
保 健 体 育	4	89	3	84	13	4	8	21.8	2	38.0
音 楽	1	7	2	4	1	1	1	6.0	0	－
美 術	1	9	0	8	3	1	2	8.0	1	3.0
書 道	1	13	2	10	4	1	2	12.0	1	10.0
英 語	6	30	3	25	12	6	7	4.7	4	6.8
家 庭	1	7	2	3	2	1	2	5.0	1	6.0
農業〔作物・園芸〕	4	6	0	5	4	4	0	1.3	3	2.3
農業〔畜産〕	1	1	0	0	0	－	－	－	1	1.0
機 械	4	4	1	3	3	3	0	1.3	2	2.0
電 気	4	5	0	5	5	4	1	1.3	3	2.3
土 木	2	0	0	0	0	－	－	－	－	－
建 築	1	3	0	2	2	1	0	2.0	1	3.0
工業化学	2	1	0	1	1	0	0	－	1	2.0
デ ザ イン	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2.0
水産〔機関〕	1	0	0	0	0	－	－	－	－	－
水産〔航海〕	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1.0
商 業	3	10	3	7	5	3	2	3.3	3	2.7
情 報	1	9	2	6	4	1	2	8.0	1	11.0
福 祉	1	2	1	1	1	1	1	2.0	1	2.0
特 別 支 援 学 校 教 諭	53	97	3	91	57	49	6	1.9	40	1.5
小 学 部	18	21	1	19	15	14	0	1.4	14	1.3
中 学 部	17	39	1	37	20	17	2	2.2	11	1.7
高 等 部	18	37	1	35	22	18	4	2.0	15	1.6
養 護 教 諭	10	135	11	121	20	10	10	13.2	10	10.4
栄 養 教 諭	2	20	1	15	6	2	4	8.0	1	14.0
合 計	433	1,216	111	1,040	578	403	139	2.9	373	2.7
特別選考Ⅰ（障がい者特別選考）	8	3	1	2	2	1	0	3.0	0	－
特別選考Ⅱ（社会人特別選考）	10	15		12	11	5	0	2.4	4	2.3
特別選考Ⅲ（スペシャリスト特別選考）	2	3				2		1.0（*1）	1	3.0（*1）
特別選考Ⅳ（他県教諭特別選考）	55	28				26		1.0（*2）	18	1.0（*2）
特別選考Ⅴ（元県内正規教諭特別選考）	10	7				2	0	2.5（*3）	0	－（*3）
特別選考Ⅵ（教職大学院修了〔予定〕者特別選考）	15	23				12	3	1.5（*4）	11	1.9（*4）
総 合 計	533	1,295	112	1,054	591	451	142	2.7（*5）	407	2.6（*5）

（*1）特別選考Ⅲの受験者数は 2 人

（*2）特別選考Ⅳの受験者数は 2 6 人

（*3）特別選考Ⅴの受験者数は 5 人

（*4）特別選考Ⅵの受験者数は 1 8 人

（*5）特別選考Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ及びⅥの受験者数を含んで算出

大分県教育委員会HPより転載

資料4 過去5ヶ年の教育職員免許状取得状況

別府大学		R2年度			R3年度			R4年度			R5年度			R6年度		
学科	免許状 の種類 (教科)	取得 件数	取得 者数	卒業 者数	取得 件数	取得 者数	卒業 者数	取得 件数	取得 者数	卒業 者数	取得 件数	取得 者数	卒業 者数	取得 件数	取得 者数	卒業 者数
国際言語・ 文化学科	高一種 (国語)	9	9	66	8	8	75	12	12	83	12	12	97	20	20	95
	中一種 (国語)	7			7			10			8			18		
	高一種 (英語)	2	2		1	1		2	2		8	8		7	8	
	中一種 (英語)	1			1			1			8			8		
	高一種 (美術)	2	2		0	0		2	2		3	3		2	2	
	中一種 (美術)	2			0			2			3			2		
史 学 ・ 文化財学科	高一種 (地歴)	16	16	85	14	14	111	12	14	104	21	24	126	25	27	97
	高一種 (公民)	13			13★			13			13			18★		
	中一種 (社会)	13			11			9			20			24		
人間関係学科	高一種 (公民)	2	3	65	1★	1	74	0	0	79	3	3	79	1	1	79
	高一種 (福祉)	1			—			—			—			—		
食物栄養学科	栄養一種	5	5	54	3	3	58	9☆	9	75	7	7	83	7	7	61
発酵食品学科	高一種 (理科)	0	0	11	2	2	27	3	3	39	5	5	32	4	4	25
	中一種 (理科)	0			1			3			4			3		
国際経営学科	高一種 (公民)	0	1	109	0	3	122	0	0	116	0	1	137	0	1	115
	高一種 (商業)	1			3			0			0			0		
	中一種 (社会)	0			0			0			1			1		

※いずれの年も、栄養教諭免許状は個人申請の為、免許取得に必要な単位数を習得した学生数。
★個人申請により免許取得した者（1名）を含む。
☆栄養教諭二種免許状申請者（1名）を含む。

資料5 別府大学教職課程履修プロセス





別府大学

〒874-8501 大分県別府市北石垣82 TEL 0977-67-0101 FAX 0977-66-9696

教職への道 No.46 (2026)

発行日	令和8年3月28日
編集者・発行者	大分県別府市北石垣82 別府大学教職課程委員会
	代表者 櫻田 裕美子
印刷所	株式会社 佐伯コミュニケーションズ